Newspaper in Education
教育に新聞を

実践報告書

2018年度

秋田県NIE推進協議会

目　　次

はじめに　秋田県ＮＩＥ推進協議会会長　阿部　昇 …… 1

小学校

新聞にふれて学んで広げよう
能代市立淳城西小学校　大髙玲子 …… 2

新聞を読み，視野を広げ，学習に生かそう
秋田市立金足西小学校　三谷　文 …… 6

新聞に親しみ，学びの楽しさを実感できる子どもの育成
横手市立浅舞小学校　向井周子 …… 10

新聞を活用した発信力の育成
鹿角市立八幡平小学校　近藤智弥 …… 14

情報発信と情報活用能力の育成をめざした新聞の活用
潟上市立飯田川小学校　淡路浩昭 …… 18

「関わり合いの中で 高め合い 学び合う NIE の実践」
～比べて話すことを通して豊かな表現力を育てる～
大仙市立豊川小学校　加賀谷秀樹 …… 23

中学校

実生活と関連付け、生かすＮＩＥの実践
能代市立能代第一中学校　相沢晶子 …… 27

新聞記事等を用いて，ものの見方・考え方を
深めることができる生徒の育成を目指して
美郷町立美郷中学校　大河見一 …… 31

一流の学び手を育むＮＩＥ
横手市立平鹿中学校　星野正博 …… 36

夢に向かい　主体的に学び　互いに高め合う生徒の育成
～『他者』との学び合いによって，学びを広げ，深めるために～
由利本荘市立由利中学校　猪股真由子 …… 40

高　校

社会の問題に関心を持ち、視野を広げ
　自分の考えを持てるようになるために
秋田県立六郷高等学校　猿　橋　知　恵 …… 44

感　想

ＮＩＥ盛岡大会に参加して
秋田県立大曲農業高等学校　佐　藤　　香 …… 48

ＮＩＥ盛岡大会にて
秋田県立大曲高等学校　小　川　　康 …… 49

ＮＩＥ盛岡大会の感想「なぜ、新聞なのか」
秋田県立横手高等学校　松　江　正　彦 …… 50

「伝える力」ＮＩＥ盛岡大会に参加して
横手市立十文字中学校　髙　田　幸　子 …… 51

ＮＩＥ盛岡大会に参加して
鹿角市立八幡平小学校　近　藤　智　弥 …… 52

ＮＩＥ盛岡大会参加の感想
能代市立淳城西小学校　大　髙　玲　子 …… 53

ＮＩＥ盛岡大会に参加して
横手市教育委員会　永　沢　敏　昭 …… 54

秋田県ＮＩＥ実践校一覧・2018年度秋田県ＮＩＥ推進協議会 …… 55

はじめに

秋田県ＮＩＥ推進協議会会長
秋田大学大学院教育学研究科教授　**阿　部　　昇**

２０１７年・２０１８年の学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」が重視されています。それと関わり「見方･考え方」を鍛えるべきことも明記されています。各教科に「言葉による見方・考え方」「社会的な見方・考え方」「数学的な見方・考え方」などが位置づけられました。また、「言語能力」「情報活用能力」「問題発見・解決能力」の育成も重視されています。さらには「社会に開かれた教育課程」という記述もあります。

これらは、いずれも新聞つまりＮＩＥに深く関わってきます。「見方・考え方」はより高次の教科内容と捉えることができますが、それを鍛えるために新聞は極めて有効です。「言語能力」「情報活用能力」が新聞と深く関わることは､申し上げるまでもないと思います。「社会に開かれた教育課程」という点からも、新聞の重要性は確認できます。

今回の学習指導要領で、教育にとって新聞が特に大切なものであるということが、一層明確になったと思います。これからはＮＩＥが一部の先生方のものから、すべての先生方のものになっていくことを強く求めているとも言えます。

＊

それを先取りする意欲的で先進的な実践が本実践集では数多く紹介されています。

国語科では、「サッカーワールドカップ2018」の記事を読み比べる小学校の授業があります。同じ記事でも「書く人によって、これほど見出しや記事の内容が違うことに驚いた」という感想が生まれました。元号についての新聞記事を資料として改元について考えていく高校の「国語表現」の授業があります。そして、実際に自分たちで元号案を作るという活動もしています。社会科では、火災についての記事を多く集め、それを検討しながら防災について考えるという中学校の授業があります。地元紙や全国紙を参照しながら、少子高齢化により地域の異変に住民が気づきにくくなっている現状、古い家屋の密集という問題などをあぶり出しました。その上で「地域の一員として、防災にどう関わるか」を考えていきました。

総合的な学習の時間では、「大豆」をテーマに新聞を活用した授業が小学校で展開されました。学年を超えての学習です。「大豆検定」を行ったり、「えだまめ通信」や「水耕栽培の新聞」作ったりしながら学習を深めていきました。小学校の道徳の授業では、スーパーボランティアの尾畑春夫さんを取り上げた記事を集め､勤労や公共についての学びを深めました。また、小学校の別の道徳の授業では、引退した秋田出身の豪風関の記事を集め、郷土愛について多様に学んでいきました。

それ以外にも、「新聞記事から始まるトークタイム」「新聞コンクール」「学級ＮＩＥコーナー」など豊かで多彩な実践が多く含まれています。

＊

これらの実践をモデルとしながら、新学習指導要領を見通した先進的なＮＩＥ実践を、秋田から発信していけたらいいと考えます。

最後に先生方にお願いです。もっともっと気軽に新聞社の方々に教材開発、授業開発などについてご相談ください。どんなことでもいいので援助を依頼してください。秋田県の新聞社の方々は、先生方からのご相談に積極的に応える準備をされています。もちろんゲストティーチャーの依頼にも応えてくださいます。教育界と新聞界とのコラボこそが、これからの新しい実践を作り出すのだと思います

新聞にふれて学んで広げよう

能代市立淳城西小学校
教諭　大　髙　玲　子

1．はじめに

本校は，能代市の中心部に位置する，児童数355名の学校である。開校10年を記念して作られた校訓「立志」のもと，子どもたちは高い志をもった人間を目指し，様々な活動に励んでいる。

今年度の研究主題は「ともに学び，ともにつくる」であり,「自己学習力」「コミュニケーション力」「問題解決力」の三つの力がつながり，広がっていく学びを実現できるよう，授業改善に努めてきた。

学校としての NIE の実践は，今年度が初めてとなる。１年目にあたり，次の３点を目標として行った。

◇できるだけ新聞にふれる機会を多くし，新聞に親しませる。
◇記事の内容を正しく読み取り，それに対して自分なりの考えを持たせる。
◇授業で積極的に新聞を活用し，効果的な活用を探る。

2．実践内容

(1)全校の取り組み

① NIE コーナーの設置

図書室前にコーナーを設置し，自由に読めるスペースを作った。本校の子どもたちは図書室利用率が高いため，多くの児童が新聞に興味を示した。注目記事は，壁に掲示し読みやすいようにした。また，数社の「子ども新聞」はストックし，家庭学習やスクラップ帳に利用しやすいようにした。

②朝学習での取り組み

火曜日を「NIE タイム」として，朝学習の15分間を活用し，３年生以上が取り組んだ。今年度使ったのは，読売新聞の「ワークシート通信」である。グラフや図表・写真なども載っており，記事と合わせて読むことで，楽しみながら問題に答えることができた。

読売ワークシート通信
2019年 10月24日(木)
増加に転じた飢餓
年　組（　）名前 [redacted]
あす 世界食料デー
紛争・災害 牙むく二重苦
◆経済成長のおかげで減りつつあった飢餓や食糧不足に苦しむ人々が，再び増えているようです。
[1]2006年以降で，世界の飢餓人口が最も少なかったのは，いつでしょうか。記事とグラフを見て答えましょう。
2014 年
[2]飢餓や食料不足に苦しむ人が，なぜ再び増えているのでしょうか。理由を二つ書きましょう
交通などで農業がうまくいかない
紛争のため
[発展問題]一方で日本では，余った食べ物を捨てる「食品ロス」が問題になっています。これについて調べて，裏に書きましょう。
読売新聞　教育関連情報は「読売教育ネットワーク」で　http://kyoiku.yomiuri.co.jp

＜読売新聞ワークシート＞

(2)学年の取り組み

①朝の NIE スピーチ

高学年では，朝の会で，「伝えよう，私のおすすめの新聞記事」というテーマのスピーチタイムを設けた。事前にスピーチ原稿を作成させ，記事を正しく読み取り，内容を正確に伝えること，選んだ理由や記事に対しての自分の考えを具体的に述べることを意識させた。スピーチの後，ペアで感想交流をすることで，様々な情報に対して関心をもたせるようにした。

②新聞スクラップ

５，６年生で新聞スクラップ作りを行った。家庭で新聞を取っていない子どももいるため，NIE コーナーから記事を選んでいる子どもが多かった。要点にサイドラインを引くこと，読み終わった後は，自分の意見を書くことを継続した。初めは，どんな記事を選んだらよいのか戸惑う子どももいたが，回を重ねるうちに慣れ，意見文の内容にも深まりが見られるようになった。学年通信では，この取り組みを紹介するとともに，子どもが選んだ記事について家庭で話題にしてほしいとお願いした。一部の家庭ではあったが，協力してくれたことは，成果である。

＜スクラップノート＞

③ミニプレゼン

６年生では，毎週月曜日の朝学習を「新聞スクラップミニプレゼンタイム」と称して，自分の選んだ記事について宣伝する時間とした。これは，NIE 盛岡大会の講演会で齋藤孝先生が紹介されていた実践を参考にしたものである。まず，グループで１人１分間，自分の選んだ記事を紹介する。グループ全員の紹介が終わった後，最も興味をもった記事を一つ選び，その話題について３分程度グループのメンバーで話し続けるという活動である。

記事の内容を１分間で伝える事はなかなか難しい。記事の一部を読んだだけでは記者の意図したものが伝わらない。この活動を続けたおかげで，記者の意図したことを正しく読み取る力や，要約する力が徐々に付いてきた。また，一つのテーマで一定時間話すことを続けてきたことで，話題に沿って話す力や話をつなげたり広げたりする力も付いてきたように感じる。

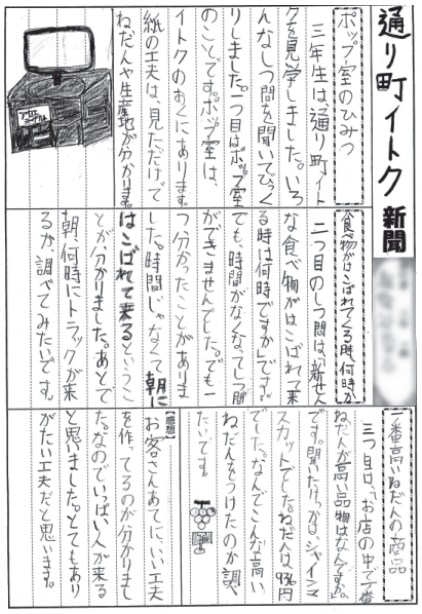
＜自分の記事をミニプレゼン＞

④学習のまとめとしての新聞作り

各学年で，積極的に取り組んだ。実際に新聞の見出しの付け方やリード文，割り付けなどを参考にした学年も多く，これまでの新聞作りに比べて完成度が高かった。

＜各学年の新聞＞

・はたらく人とわたしたちのくらし
・大好き，風の松原　（３年生）
・大切な水，くらしを守る消防（４年生）
・宿泊体験学習の思い出　（５年生）
・修学旅行での体験記　（６年生）



通り町イトク 新聞

ポップ室のひみつ

三年生は通り町イトクを見学しました。いろんなしつ問を聞いてくりました。一つ目はポップ室でのことです。ポップ室は、イトクのおくにあります。紙の工夫は、見ただけでねだんや生産地が分かります。

食べ物がはこばれてくる時、何時か

二つ目のしつ問は「新せんな食べ物がはこばれて来る時は何時ですか」です。聞いたら、なんと、シャインスカッドでしたねだんは、98円でした。なんでこんなに高いねだんをつけたのか調べたいです。

一番高いねだんの商品

三つ目は「お店の中で一番ねだんが高い品物はなんですか」です。聞いたら、「ハ、はこばれて来る」ということが分かりました。あとで朝、何時にトラックが来るか、調べてみたいです。

感想

お客さんあてに、いい工夫を作ってるのが分かりました。なのでいっぱい人が来ると思いました。とてもありがたい工夫だと思います。

＜３年生のはたらく人新聞＞

⑤新聞を活用した授業

◇６年道徳「社会のためにつくす」勤労，公共の精神　C-（14）

この授業は，朝日新聞（10／14）の「恩返しの奉仕　年金で十分」の記事を中心教材として行ったものである。この記事には，昨年，スーパーボランティアとして各種メディアに取り上げられた尾畠春夫さんの生い立ちや考え方が記されている。ボランティア活動を続ける尾畠さんの生き方を知り，思いを考える中で，働くことや社会に奉仕することの意義を理解し，公共のために役に立つことへの意欲を高めることをねらって行った。

授業では，記事を読んだ感想を元にしながら，尾畠さんの考え方や生き方を集約し，これらを支えている思いについて議論させた。タイトルにもある「恩返し」の意味を問うことで，子どもたちは様々な角度からじっくりと考えていた。終末には自分の生き方にどのようにつながるかを考え，まとめさせた。

＜記事から学んだ事を出し合う＞

【この授業における成果と課題】

○子どもたちがよく知っている人物の記事を活用することで，興味をもって課題解決に向かうことができた。また，記事を通じて多くの事実を知ることで，人物像を捉えやすいという利点もあった。

○グループの話合いでは，どの子どもも，自分事として捉え直したことを真剣に語っていた。

○関連資料として複数の記事を提示することで，多方面で活躍する事実を伝えることができた。

●記事そのものを活用する場合，読み取りに差が出る。また，複数の価値が混在するため，記事の提示の仕方や発問を吟味する必要がある。

＜補助資料として提示した記事＞

◇５年道徳「ふるさと秋田のために」
伝統や文化の尊重，国や郷土を愛する態度　C-（17）

平成３１年１月２２日，郷土出身の力士豪風関が引退した。この授業は，そのことを報じた記事を取り上げ，相撲にかけた豪風関の思いについて考えた。

初めに見出しが「３９歳，１７２センチ豪風完全燃焼」の記事を提示した。この記事から子どもたちは，「年齢に関係なく，勝つために努力をした。」「大きな相手にも負けないように努力した。」などと，豪風関の思いを考えた。そこで，「それだけだろうか」と問いながら次の記事を提示した。

この記事は，豪風関が場所後にいろいろな地域を訪れ，交流していたことを報じたものである。

秋田さきがけ

現役時代、各地で交流

豪風関 みんなを笑顔に

22日に現役を引退した大相撲の元関脇で十両12枚目の豪風関（39）は、本県に帰省するたびに故郷の北秋田市をはじめ、県北地区の小学校や高齢者施設、病院などを訪れ、多くの住民を元気づけてきた。住民との交流の数々を写真で振り返る。

稽古　大館市の比内養護学校（当時）で、相撲部員に胸を貸す豪風関（中央）＝2011年12月

はい、チーズ！　相撲教室後、写真撮影に応じて住民との交流を楽しんだ＝2016年6月、大館市比内

胸試し　母校の北秋田市の胸相撲をする豪風関

ら下がるかみこ＝2018年2月

記事に用いられている写真や見出しから，様々な意見が出てきた。

・少しでも長く相撲をとって，応援してくれる秋田の人に恩返しをしたかったのではないか。
・相撲でいろいろな人を笑顔に（元気に）したかったのではないか。

初めは自分のために相撲をとっていたのではないかと考えていた子どもたちが，二つの記事を読み比べることによって，地域にかける思いも大きかったことに気付いていった。

授業の振り返りには，次のようなことが書かれていた。「豪風関のように，人を元気，笑顔にできるようにわたしも努力をしたい」。同じような内容の振り返りをした子どもがたくさんいて，こうしたふるさとにかける思いは，本校の校訓である「立志」の実現にもつながるものである。

３．成果と課題

○新聞記事に興味を示す子どもが非常に増えた。スピーチやスクラップを使ったミニプレゼンを楽しみにしている子どもも増えた。
○読むスピードが速くなった。また，要点を整理したり，まとめたりする力が徐々に付いてきている。
○社会に関心を持ち，社会で問題になっていることを自分たちの問題としてとらえ，よりよい社会になってほしいという意識をもたせることができた。
○道徳や国語等で，新聞を中心教材や補助教材とすることで，授業での効果的な活用の仕方を探ることができた。
●教師主導の実践が中心であった。児童の主体的な活動を促すためにも，児童会でも新聞を活用した活動に取り組ませたい。
●今年度は，各学年に実践を任せたが，学団や全校で一斉に取り組む機会を設け，新聞の有効活用を図りたい。
●２年目としての研究を深めるためにも，新聞を活用することでどんな力を付けるべきかを明確にしたい。

新聞を読み，視野を広げ，学習に生かそう

秋田市立金足西小学校
教諭　三　谷　　文

１．はじめに

本校は，秋田市北部に位置し，児童数１７２名の小・中規模校である。田園と緑の木々に囲まれ，恵まれた環境にある。また，本校は，「どじょっこふなっこ」の歌発祥のの地として知られ，毎年，「どじょっこふなっこの歌を楽しむ集い」が開催されている。保護者や地域の方々と感動を共有し，文化を継承している。

今年度，ＮＩＥ実践校として，新聞を学習活動に取り入れ，様々な世界に触れたり他者の考えを知ったりすることを通して，自分の考えを深めようとする態度を育てることを目指して授業づくりや環境整備を行ってきた。

２．実践内容

⑴各学年の実践から

【１年生】

○国語科「かたかなをみつけよう」

子ども新聞等から，かたかなを見付けて，単文を作る活動を図書館司書とティーム・ティーチングで行った。

新聞から言葉を探すことで，今まで以上にかたかなの言葉に興味を示し，言葉の意味や記事の内容を何度も質問して，たどたどしいながらも記事を読むことができた。予想以上にかたかなが多く使われていることに驚き，たくさんの言葉を見付けてノートに書くことができた。探した言葉を使って文を書く作業にも，意欲的に取り組み，どのような言葉がかたかなになっているかを考えていた。授業後の振り返りでは，新聞の文字や文章にじっくり向き合ったことが初めてだった，と答えた子どもがほとんどだった。活動後は，図書館で新聞に興味を示し，手に取る子どもが少しずつ増えている。

〈ペアで言葉を探している様子〉

〈言葉の意味や記事の内容を，図書館司書に聞いている様子〉

【２年生】

○国語科「冬がいっぱい」

新聞記事の中から，冬に関係する言葉を探し，カードに書く活動を行った。

子どもたちの新聞への興味・関心が大変高く，活動が終わってももっとやりたいとの声が多く上がった。これまで新聞をじっくり読む機会はほとんどなかった

子どもたちが，興味を持って新聞に向かっていた。

【３年生】

○国語科「冬の楽しみ」

冬らしい言葉を新聞から見付ける活動を行い，次の時間には，見付けた言葉をもとに五・七・五のリズムで文を作る活動を行った。

この活動により，新聞には，たくさんの言葉が載っていることに驚く子どもが多く見られた。また，新聞でさらに言葉を見付けてみたいという気持ちが高まった。意味が分からないときは，国語辞典を使って熱心に調べるなど，言葉の意味を知りたいという欲求が強くなってきた。

〈冬らしい言葉を探す様子〉

【４年生】

○国語科「新聞を作ろう」

実際の新聞にも触れながら，新聞名，見出し，記事，絵・図，割り付けなど，聞を構成する内容を学習した。

○総合的な学習の時間「ふれあおう　はじめの一歩」

国語の「新聞を作ろう」の後に，福祉について自分たちで調べたことを新聞にまとめ，友達に伝えようという活動を行った。

○社会科「水はどこから」「ごみはどこへ」

校外学習で訪れた仁井田浄水場，総合環境センター，リサイクルプラザから一カ所を選び，学習してきた内容を新聞にまとめる活動を行った。

見出しや絵・図など，紙面の至る所に読み手のための工夫があることを理解し，目を引くような見出しを考えたり，絵や図を使って分かりやすくしたりすることができた。また，校外学習の内容を新聞にまとめる活動では，新聞の作成が２度目ということもあり，見出しや挿絵，記事の内容の精選など，進歩が見られた。

【５年生】

○国語科「新聞を読もう」

複数の新聞記事を読み比べることの意味や効果を知ったり，見出しやリード文から要旨を捉えたりすることができることをねらい，単元を展開した。

＊単元の流れ

・新聞から見付けた気に入った記事について，分かったことと感想を書く。
・報道記事の特徴をつかむ。
・教師が用意した一般紙の記事の中から，気に入った記事を選び，同じ記事を選んだ友達と感想を交流する。
・二つの記事を読み比べる。

取り上げた記事

「日本 見えた金星，幻に」
（７/４秋田魁）

「夢の８強 まだ遠く」　（７/４読売）

二つの記事を比べて読む学習をするために，秋田魁新報と読売新聞に掲載された「サッカー2018ワールドカップロシア大会」の記事を図書館司書にストックしてもらった。読み比べの学習後の振り返りには，「同じ出来事を伝える記事でも，新聞によって考え方や注目するところが違うことが分かった。」「二つの新

聞を読むことで，たくさんの情報を得ることができる」「記事を書く人によって，これほど見出しや記事の内容が違うことに驚いた」といった感想が書かれていた。比べて読む経験はほとんどの子どもにとって初めてのことだったが，読み比べることの意味やよさに気付いた子どもが多かった。また新聞への関心も高まった。

〈二つの記事を読み比べる様子〉

【６年生】

○国語科の「学級討論会をしよう」

社会的な話題を取り上げ，賛成・反対の立場に立ってお互いに意見を交わした。その際，新聞の記事から必要な情報を得ながらグループで意見をまとめる活動を行った。

○社会科の歴史の学習

夏休み前までの学習内容から自分で課題を決め，学習内容をまとめた歴史新聞を作成する活動を行った。

○総合的な学習の時間「見つめよう自分～１２歳のドリームロード～」

自分の生き方を考える前段階として，まずは自分たちが暮らしている秋田県にはどのような課題があるのかを新聞から探る活動を行った。

○社会科の公民分野の学習

学習内容が自分たちの生活と密接しているということを実感できるよう，学習内容が新聞の記事にどれぐらい登場しているのかを調べる活動を行った。

学習した内容を新聞にまとめる活動では，紙面作成の例として実際の紙面を取り上げることにより，見出しや割り付けの工夫,内容の充実を図ることができた。また，時事欄や社説など，紙面の構成や記事の特性を理解し，目的意識をもって新聞を読み込むことができた。 そして，新聞によって取り上げる記事の種類や内容に違いがあることに気付き，得たい情報によって新聞を選択して読み込む姿が見られた。断片的に情報が得られるインターネットよりも，多面的，総合的に情報を得られる新聞のよさを実感し，日常的に新聞を読む児童が多くなってきた。さらに，世の中の出来事や問題に対する関心が高まり，社会的な話題で議論する姿が見られるようになってきた。

⑵図書委員会の活動

各学年の図書委員のおすすめの記事を集めて，切り抜き新聞作りを行った。割り付けも話し合い,コメントを書き貼り付けた。図書室前に掲示して紹介し,新聞への関心・意欲を高めるようにした。

〈図書委員のおすすめ新聞〉

⑶図書館司書との連携

①新聞コーナーの設置

児童がよく通る児童玄関や図書室前に

は，図書館司書が選んだ記事を掲示している。また，子どもたちの活躍等が掲載された記事も掲示して紹介した。

〈図書室前の新聞コーナーの掲示〉

〈４～６年生教室前の新聞コーナー〉

４～６年生の教室がある３階の新聞コーナーでは，その日の新聞３～４紙を手に取って読めるようにした。約１カ月分の各社の新聞も棚に集めて置いた。新聞の交換や掲示などは，図書館司書が管理しており，子どもたちがスピーチの題材を探したり，担任が授業で活用したりする時に使いやすい環境となっている。

②司書作成の「おすすめ記事」の活用

図書館司書が学年に合わせて作成した「おすすめの記事」やテーマごとの「おすすめ記事」を印刷し，図書室前や４～６年生教室前の新聞コーナーに置き，子どもたちが自由に持って行って読めるようにした。

〈司書が作成したおすすめ記事〉

３．成果と課題（○成果　●課題）

○図書館司書と連携して学習環境整備を行ったり，記事の収集やコピー，切り抜き等の各学級の活動を補助してもらったりすることで，全校の子どもたちが新聞を活用した様々な学習や活動に取り組むことができた。

○単元の流れや学習活動を工夫したことによって，自分の考えや視野が広がるよさを味わい，新聞と，新聞に書かれている記事の内容に関心をもつ子どもが増えてきた。

○国語科を中心に各教科で新聞を効果的に活用することにより，読解力や言葉への関心が高まってきた。

●新聞を読む時には，記事の内容が難しく，理解できない子どもも見られた。児童の実態に合わせた新聞の提供の仕方を工夫することや，授業で取り入れることを継続的に行うことで，興味・関心が持続できると考える。

●家庭で日常的に新聞を手にする子どもたちが多いとは言えない。新聞を活用した授業の様子をおたより等で保護者にも知らせることで家庭にも啓蒙していきたい。また，家庭学習を活用し，授業で活用した新聞記事について家庭で話題にする機会を増やした。

新聞に親しみ，学びの楽しさを実感できる子どもの育成

横手市立浅舞小学校
教諭　向　井　周　子

１．はじめに

本校は,研究主題を「平鹿発！『学び合い』その先へ！　～言葉をつないで学び合い，学びを実感する授業づくり～」とし，他と進んで関わり合い主体的に自分の問いを解決しようとする子ども，互いのよさを認め合い共に学び合う子ども，自分の学びを実感し自己有用感を持つ子どもの姿を目指して研究を進めている。

今年度は，ＮＩＥ実践指定２年目である。思考を支える言葉の力を育成するために，新聞と触れ合う機会を大事にしながら，発達段階に応じた段階的で継続的な指導が必要であると考え実践してきた。

２．実践内容

⑴ＮＩＥの環境づくりの工夫

①「学級ＮＩＥコーナー」の設置

全学級の廊下にＮＩＥコーナーを設置し，一人一人の考えや感じ方が見えるように，全員のシートを掲示している。同じ記事でも，一人一人の考えは多様であることを感じさせたり，語彙を増やしたりすることを目指した。

６年生のＮＩＥコーナー

②「学校ＮＩＥコーナー」の整備

年度当初は，校舎２階に設置していた「学校ＮＩＥコーナー」（ほっとステーション）を，より活用しやすくするために，１階のコモンホールに移動した。一般向けの新聞や児童新聞を置くコーナーをつくり，いつでも新聞に親しむことができる環境を整えた。環境美化委員の児童が，閲覧コーナーの新聞の入れ替えを担当し，おすすめの記事が載っているページを開いて掲示するなど工夫している。新聞はストックし，児童の学習（家庭学習の調べ学習等）に使えるようにまとめている。

学校ＮＩＥコーナー

③理科室・イングリッシュルーム・保健室前のＮＩＥコーナー

それぞれの特性に応じたコーナーを設置し，単元に関係のある内容や身近で驚きが感じられる記事を選定して掲示している。

④昼の放送で新聞クイズの出題

新聞に関心をもってもらうために，環境美化委員会の児童が昼の放送で新聞記事のクイズを出題するなど，新聞を活用した活動を工夫している。

2）新聞を活用した授業の実践

①１年国語「カタカナをさがそう」

カタカナを学習したあと，新聞の１面からカタカナを探してシートに書き写した。意味について興味を持った言葉を取り上げ，確認し合った。

②２年国語「気づいたこと，思ったことを書こう」

記事を読み，分かったこと，思ったことを文に書いた。

２年生の実践

③３年理科「どれくらい育ったかな」

記事を読み，植物のつくりの比較をした。

④４年国語「新聞を作ろう」

ザギトワ選手に送られた秋田犬についての記事を使い，新聞の特徴を捉える学習の教材にした。

⑤５年社会「水産業のさかんな地域」

北方領土問題について学んだことを新聞記事から見付け，分かったことや考えたことを付箋に記入し掲示した。

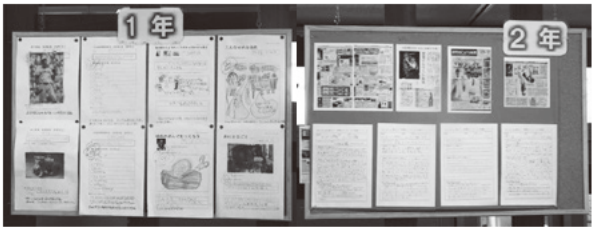
⑥６年道徳「誠実に生きる」（ヤクーバとライオン）」

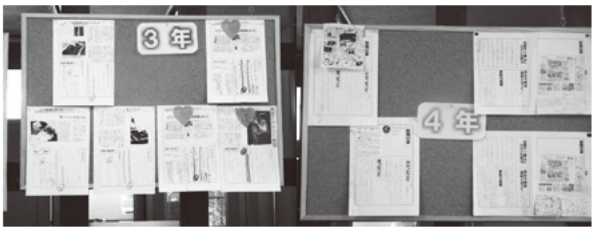
「正直，誠実」に関する新聞記事を事前に子どもたちに集めさせた。その記事のどんなところに「正直，誠実」を感じたのか，ヤクーバと共通するところはどんなところかなどを問うことで，道徳的価値の理解を図った。

６年道徳の実践

⑦指導の系統性を意識しながらの実践

各学年のＮＩＥの取り組みを１カ所で見ることができるように，学校ＮＩＥコーナーに掲示した。新聞活用を系統立てて行うための参考にした。





コモンホールにある各学年の掲示

⑶みんなで読むことのよさを実感させる活動の工夫

①横手市「新聞の日」と良学の時間のＮＩＥの設定

朝の15分間は良学の時間として設定され，月曜日から木曜日までは読書，金曜日はＮＩＥを行っている。さまざまな情報に触れさせ，考えを広げたり深めたりするきっかけづくりをしている。

②第２回横手市「みんな de 読もう！新聞コンクール」

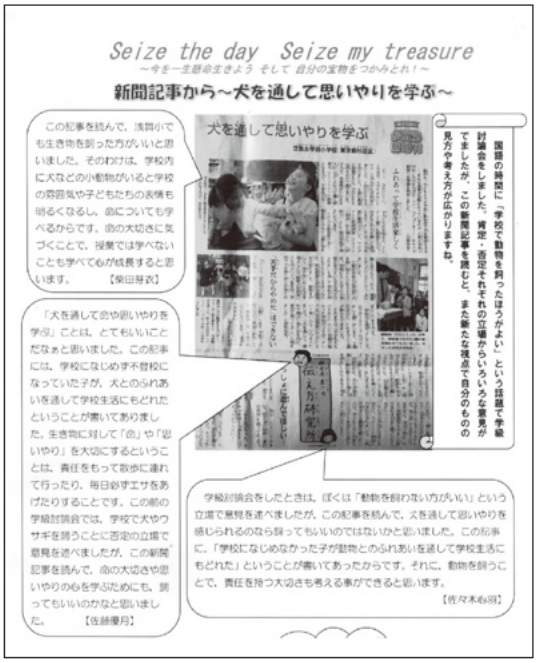
同じ記事を読んで家族にも感想を書いてもらうなど，親子でＮＩＥを体験するコンクールに全員参加した。

応募した作品から

③家庭への紹介

学級通信でＮＩＥの実践について知らせ，家庭でも話題にすることを勧めている。

６年学級通信から



６年学級通信から

⑷ＮＩＥアンケートから

６月と２月に，全児童を対象に今年度のＮＩＥについてのアンケート調査を行った。

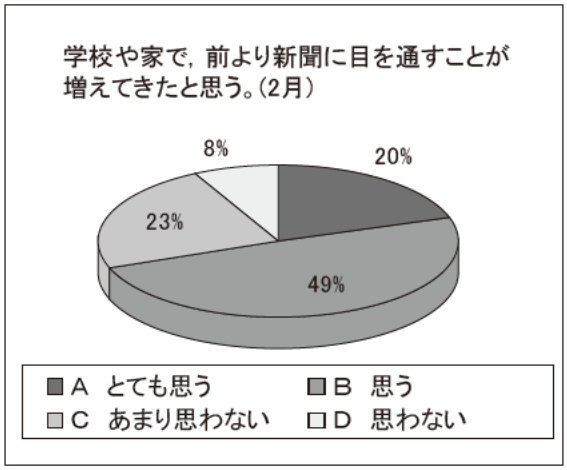


表１

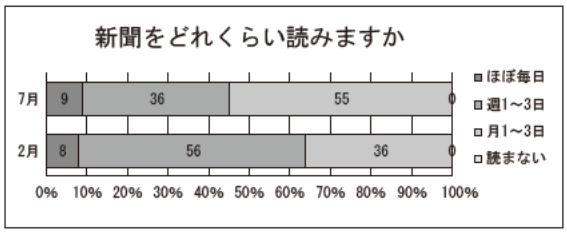


表２

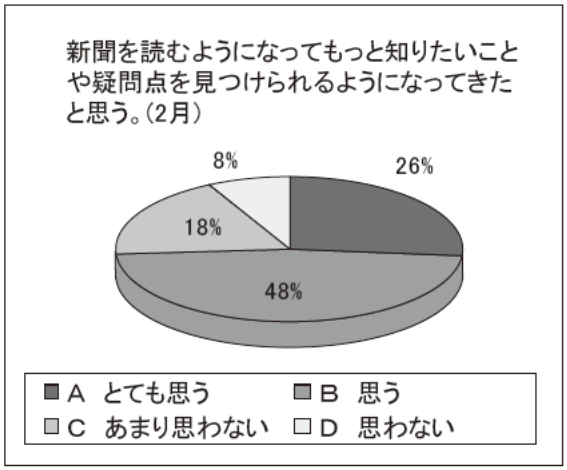


表３

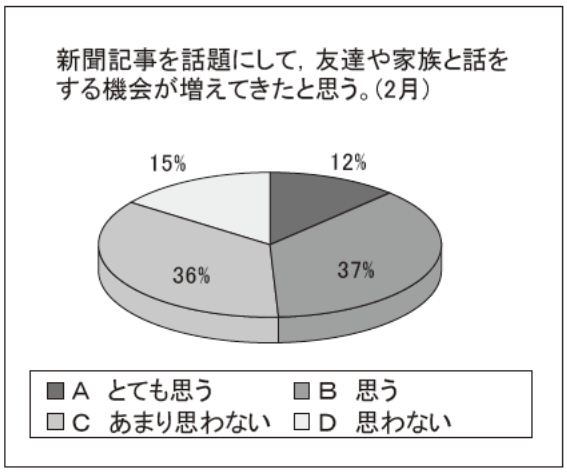


表４

・「学校や家で，前より新聞に目を通すことが増えてきたと思う」について，69％の子どもが「とても思う・思う」と答えた。
・「新聞をどれくらい読みますか」について，「毎日・週１～３日」と答えた子どもが45％（６月）から64％（２月）に増加した。
・「新聞を読むようになってもっと知りたいことや疑問点を見つけられるようになってきたと思う」について，74％の子どもが「とても思う･思う」と答えた。
・「新聞記事を話題にして，友達や家族と話をする機会が増えてきたと思う」について，49％の子どもが「とても思う・思う」と答えた。

３．成果と課題

(1)成果

○児童が足を止めやすい場にＮＩＥコーナーをつくったことで，多くの児童が気軽に新聞に目を向けるようになった。

○発達段階や実態にあった新聞活用の仕方を工夫することで，新聞がより身近なものとして活用される場面が多くなった。

○記事を読んで疑問に思ったことを調べたり，自分の考えを他者と交流したりする場を通して，主体的に学習に向かう姿勢が見られるようになった。また，相手意識をもって伝える力が伸びてきた。

(2)課題

●15分間の良学の時間を使ってＮＩＥを進めてきたが，じっくり読んだり，書いたりする時間を確保することができなかった。そこで，新しい新聞が届いたら15分間じっくり読む，15分間で感想や考えなどをまとめる，15分間で意見交流をするなどの大枠を決めて，全校で取り組んでいきたい。

●低学年，中学年，高学年における身に付けさせたい力が整理されていなかった。指導計画に明記し，全職員で共通理解を図りたい。

●学校ではＮＩＥの時間を設定して新聞に親しむ機会をつくっているが，日常生活の中で，自ら記事を話題にして友達や家族と話す子どもは少ない。機会を捉え，家庭にも啓蒙していきたい。

新聞を活用した発信力の育成

鹿角市立八幡平小学校
教頭　近　藤　智　弥

１．はじめに

本校は、緑豊かな八幡平の雄大な自然に囲まれ、春夏秋冬の移り変わりを校舎から間近に望むことができる。全校児童数は、昨年度と変わらず１８７名である。地域の方々や保護者は学校への関心が高く、本校の教育活動に対しても大変協力的である。学校教育を推進していく上で、恵まれた環境にあることを日々実感している。

２８年度からＮＩＥの実践に取り組み始め、今年度が３年目となる。今年度は、昨年度までの実践を継続すると共に、新聞の教材としての活用方法についての可能性を探り、更に広げることを目指して取り組んできた。

２．実践内容

⑴国語科での記事の構成を考える学習

【単元名】私たちの町を紹介しよう（６年）

【取り組みの内容】

・夏休み中に本校を訪問する東京都の小学生に、鹿角市の名産品や伝統芸能を紹介するパンフレットを作成することになり、読み手に分かりやすく、正しく伝えられるように，新聞記事の構成について学習した。

・前回作成したパンフレットと，新聞の一面を見比べ，記事の見やすさと読みやすさについて課題を提示した。

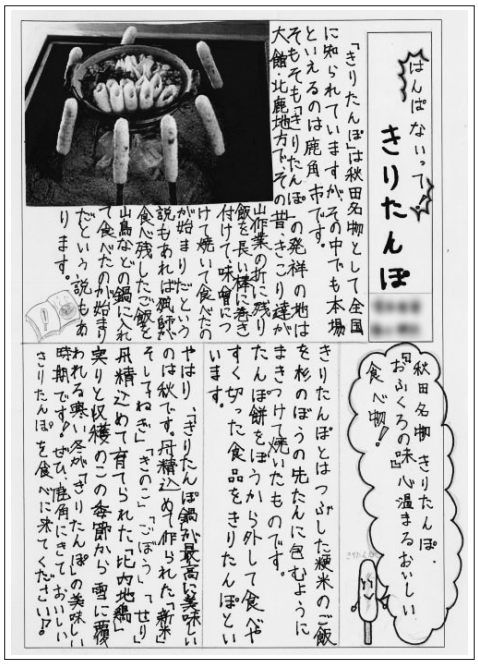
・新聞記事は，同様のニュースを扱っているものを複数選んで比較し、知らせたい内容や大事にしたいポイントによって、記事の構成が変わることを捉えられるようにした。

・グループ毎に新聞記事の構成についての特徴や共通点を見付け，それを全体で共有し特徴をまとめた。まとめた特徴に沿って，自分たちが書いた記事を構成し，パンフレットを作成した。

【児童の様子】

・複数の新聞記事を比較したことで，より構成の工夫に目が向くようになり，多くの特徴を見付けることができた。

・見出しの書き方について注目した児童もいた。気に入った見出しについて理由を話し合ったことで，より分かりやすく伝えるためには言葉選びも重要であることについても理解を深めることができた。



《秋田名物のきりたんぽを紹介した新聞形式のパンフレット》

⑵総合的な学習の時間での新聞作り

【単元名】しぼり大根を知り隊！広め隊！～まとめ新聞をつくろう～（３年）

【取り組みの内容】

・「どうして名産品になったのか」「どうして辛いのか」などの疑問に思うこと

を挙げ，学習課題づくりを行った。

・しぼり大根農家の方を招いて特徴や育て方，歴史などの話を聞き，疑問に思うことを質問し，情報を集め，話を聞いて分かったことを新聞にまとめた。

・農家の方の指導の下，種まきや間引き，収穫作業を体験した。

《しぼり大根農家の方を招いて勉強会》

【児童の様子】

・興味や疑問について，一人一人が予想を立て，目的意識を持って話を聞くことができていた。

・過去のニュース映像を見ながら，分かったことを積極的にメモしていた。

・農家の方の工夫や願い，しぼり大根の味の特徴，辛くなるために必要な環境などを関連付けて考え，学習課題についてまとめていた。

・新聞づくりの本を利用したり，上学年の書いた新聞を参考にしたりしながら，新聞の題名や見出し，割り付けや記事の書き方を工夫していた。

《グループで作製した壁新聞を発表》

・新聞には，読む人が興味を引くような写真や記事の内容に合ったカットを入れながら分かりやすく書いていた。

・最後にできあがった新聞を読み合い，友達の新聞のよさを交流した。

⑶社会科での新聞作成

【単元名】水はどこから（４年）

【取り組みの内容】

・各家庭の水道水の使用量や，鹿角市の人口と給水量の推移について調べたことから疑問をまとめ，単元を貫く学習課題を「水はどこでつくられ，どのようにして送られてくるのだろう」と設定した。その課題解決に取り組んだ。

【児童の様子】

・浄水場の見学に行き，水をきれいにするための工程や，働く人たちの思いなどについてインタビューをした。

・学習したことを新聞にまとめることに決め，浄水場のしくみやダムの働き，自分たちにもできることなどについて，インターネットや図書館を活用して情報を集めた。

・作成した新聞は，鹿角市の「かづの環

《児童が作成した新聞》

境新聞コンクール」に出品することにした。

・新聞の下書きから完成までに，意図的に新聞を見合う時間を設定し，読む人を意識しながら書くようにした。

⑷国語の授業での実践

【単元名】新聞を読もう（５年）

【取り組みの内容】

・新聞の編集の仕方や記事の構成について学習した後で，教師が準備した記事や自分の興味のある記事について考察した。考察した記事についての意見や感想をグループ内で発表しあったり，付箋に記入して教室内へ掲示したりした。

【取り組みの様子】

・新聞は，社会，経済，スポーツなど様々な種類の記事で編集され，構成されていることに気付いていた。

・記事には，新聞名や発行日が右上にあることを知っていたが，記事の題にあたる見出しで内容を短い言葉で表したり，リード文で記事の内容を短くまとめていることを新たに見付けていた。

《新聞記事についての意見や感想を付箋に記入》

《友達同士で意見や感想を交流》

《意見や感想を記入した付箋を新聞に貼り教室に掲示》

・写真の掲載の仕方も，大きさ，位置，カラーやモノクロなど記事との関係で様々であることに気付いていた。

・自分の興味のある記事についての意見や感想を付箋に書いて交流することで，人によって同じ記事でも受け止め方が様々であることに気付いていた。

⑸環境新聞の作成

【取り組みの内容】

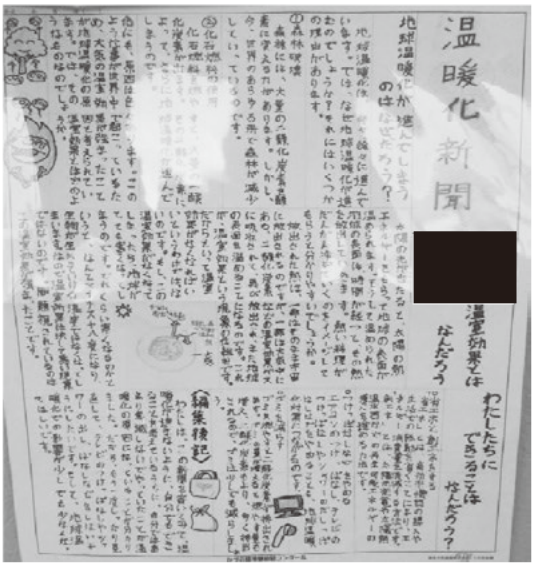
・４年生以上の全児童が夏休みの課題として環境新聞に取り組んだ

・夏休み前に，各学級担任が新聞を用いて，紙面の割り付けの仕方や，効果的な記事の書き方などを指導した。

【取り組みの様子】

・各学級担任から提示された新聞には，文字だけでなくグラフや表，イラストなどが掲載されていて，その多様さに興味を持って新聞記事に目を通していた。

・環境問題について調べる際に，情報源として新聞に目を通す児童もいた。情報収集して発信するという目的を持って新聞を読むため、新聞記事全体にしっかりと読む様子が見られた。



《掲示された環境新聞》

⑹放送委員会の実践

【取り組みの内容】

・毎週金曜日の昼の放送で，放送委員がその週の新聞から記事を選択し，記事の主な内容と自分の感想を紹介した。

【取り組みの様子】

・放送の内容が偏らないように，スポーツ，時事問題，地域での児童生徒の活躍など様々な記事を取り上げていた。

・放送を聴いている児童たちからは，友達同士で頷いたり，自分の感想を述べたりする姿が見られ，給食中の全校児童の話題となっていた。

《新聞記事を選び，選んだ記事を放送で紹介する児童》

⑺児童玄関前の新聞コーナーの充実

【取り組みの内容・様子】

・昨年度に続き，当番になっている図書委員が職員室に当日の新聞を受け取りに来て，新聞コーナーに並べた。

・当番の児童が，全校児童に読んでほしい記事を選び，目に付きやすいように紙面を広げて置いた。また，みんなの目に留まるように，ポップを手作りした。手作りしたことで，新聞コーナーが，より身近に感じられるようになり，足を止めて読む児童が増えた。

３．成果と課題

⑴成果

・家庭で新聞を読み感想を家庭学習ノートに書いてくる児童や，学校の新聞コーナーの新聞を読む児童が増えるなど，新聞への関心が高まった。

・調べたことや感じたことをまとめて発信する手段として，新聞を選択する児童が多くなった。

・図や表，グラフなど，視覚的効果も考えて新聞を作成したり，委員会活動でのお便り作りをするようになった。

・収集した情報から必要な情報を短時間で取捨選択できるようになってきた。

⑵課題

・自作の新聞のレイアウトや内容についてだんだんとパターン化してしまう児童も見られる。新聞や子ども新聞などを，その都度提示して参考にさせるなどしていきたい。

・学習中だけでなく，日常的に児童が新聞に触れられるような環境づくりや活動を考えていきたい。

・自分自身で推敲していく力をさらに身に付けさせられるられるように，継続した作文指導や語彙を豊かにする指導が必要である。

・自分が興味を持った記事については，意欲的に読んでいたが，政治や経済などやや馴染みの薄い記事については，どうしても関心が低かった。様々な種類の記事への関心を高め，多様な見方や考え方ができるようにさらに指導していきたい。

４．おわりに

ＮＩＥの実践も３年目ということで，各学級担任も授業で新聞を活用することに大分慣れた様子が見られ，子どもたちも新聞記事の特徴を理解し活用できるようになった。何よりも，子どもたちの新聞に対する関心が高まったことが，実践を継続してきての一番の成果だと考える。

ＮＩＥ実践校としての３年間の取り組みが，子どもたちの成長を促す貴重な機会となった。最後に，その機会をいただいた秋田県ＮＩＥ推進協議会に感謝申し上げたい。

情報発信と情報活用能力の育成をめざした新聞の活用

潟上市立飯田川小学校
国語・総合・環境担　淡　路　浩　昭

1．はじめに

本校は，秋田県の中央部に位置する潟上市にある全校児童１７６名の小・中規模校である。学校教育目標「よりよく生きる～夢　笑顔　学ぶ瞳～」のもと，「未来をよりよく生き抜く子ども」の姿を目指して，「たくましい子　やさしい子　かしこい子」に育つよう，「夢　笑顔　学ぶ瞳」を合い言葉にして教育活動に取り組んでいる。学校農園とその活動を支援してくださる地域人材を活用するなど，地域に根ざした教育活動を行っている。

〈５年　総合的な学習の時間　田植え〉

２８年度からＮＩＥの活動に取り組み，今年度が３年目である。ＮＩＥ活動は，新聞を活用した情報農活用能力の育成のために，総合的な学習の時間や理科や社会の校外学習の跡目としての新聞作りや国語・理科の発展学習としての新聞の活用にも取り組んできた。

2．実践の内容

⑴新聞を活用するための環境づくり

新聞を児童にとって身近なものにするために，図書室に子ども新聞コーナーを設置した。毎週日曜日に発行される『さきがけこども新聞』のほかに，資料としていただ『毎日子ども新聞』『朝日小学生新聞』を，いつでも自由に児童が閲覧できるようにしたことで，日常的に新聞に触れる環境ができ，休み時間などに児童が手に取って興味深く読む姿が見られた。

〈図書室　子ども新聞コーナー〉

〈図書室前廊下　ＮＩＥコーナー〉

さらに，図書室前の廊下に新聞の特集記事を紹介するＮＩＥコーナーを設置した。2018年の県内・国内・世界の10大ニュース，『なまはげ』のユネスコ無形文化遺産登録，日本の宇宙探査などについての記事は，児童の関心が高かった。

ほかにも，児童会の環境委員会の活動として児童の気になった潟上市や近隣の市町村に

関する記事を『ちょこっとＮＩＥ』として校内の数か所に掲示した。児童が見逃している記事も多く，立ち止まって読んでいる姿が見られた。

〈潟上市・近隣市町村のニュース〉

〈環境委員会のニュース紹介〉

⑵新聞を通した情報発信

①総合的な学習の時間

本校では，総合的な学習の時間に，地域に根ざした農業に関連したテーマで学習を行っている。テーマは以下の通りである。

３年：大豆検定（初級編）

４年：大豆検定（上級編）

５年：ふれあいマイ田んぼ

３年生は,「大豆検定(初級編)」として,「湯上がり娘」「秋田ほのか」「かおり五葉」など，数種類の大豆を栽培し，生長していく様子を観察し，収穫した枝豆の大きさ・形・味の違いなどを調べ，それぞれの特徴を調べた。味を調べる際には，種類毎のゆで時間と堅さの変化についても確かめた。学習のまとめとして,「えだまめ新聞」を作り，掲示した。

〈３年　えだまめ新聞〉

４年生は,「大豆検定（上級編)」として，大豆の加工品について調べ，大豆がどのように活用されているのかを児童それぞれがテーマに沿って資料を集め，分かったことをまとめた。地域のＪＡに協力を依頼し,児童が味噌作りに挑戦した。児童それぞれが味噌の熟成を期待しながら持ち帰った。活動のまとめとして，新聞にして掲示した。

〈５年　水稲栽培のまとめ〉

５年生は,「ふれあいマイ田んぼ」の学習として，学習田とバケツ稲の栽培を通し，その生長の様子を調べた。今年は芽出しをテーマとした。麦茶・紅茶・とぎ汁・天然水などの芽出しに使った水の違い，芽出しの水の温度や水量の違いに

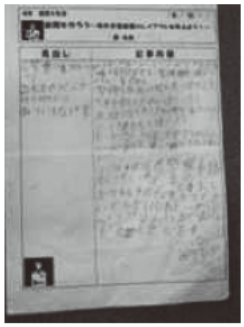
よるバケツ稲の収量の違いを調べた。学習の最後に，児童がそれぞれに新聞としてまとめた。

各学年がテーマに基づいて取り組んだ実践をまとめ，秋田県種苗交換会学校農園展で発表し，11年連続で最優秀賞を受賞している。

〈学校農園展　活動記録〉

②社会科の学習

社会科の学習では，各学年で施設を見学した後に，児童それぞれが分かったことを新聞にしてまとめた。


〈見学メモ〉

４年生では，学習のゴールとして，取材したことを元に新聞を作り，互いに伝え合う活動に取り組んだ。児童が自分の疑問点を解決するために，秋田市消防本部，秋田県警本部を見学した。見学後には，自分が取材したことを元に新聞にしてまとめた。

③理科の学習

６年「変わり続ける大地」の学習で，男鹿ジオパークを見学した。各地層を観察し，その成り立ちについて説明していただいた。男鹿ジオパークセンターでも，児童は自らの疑問点を解決するために，熱心に質問した。調べたことは，新聞としてまとめ，児童で情報交換を行った。

〈６年　男鹿ジオパーク新聞〉

⑶情報を活用する

①国語の授業

４年「アップとルーズで伝える」の学習では，教材を元に，アップとルーズそれぞれの良さと活用の仕方について理解を深めた後で，新聞を活用した学習活動を行った。実際の新聞に掲載されている写真を取り上げ，児童がアップであるかルーズであるかを判断して，どんな良さがあるか，またどんな課題があるかについて話し合い，意見を交換した。

２年「主語と述語」では，子ども新聞から，「は」「が」を手がかりにして主語

〈子ども新聞連載小説〉

と述語探しをした。長文にやや抵抗のある児童には，子ども新聞の連載小説を提示した。Ａ４またはＢ４の大きさの紙面であること，文章の量が限定されていること，児童向けに易

〈主語と述語〉

しい文章で書かれていることなどから，文章を読むのが苦手な児童でも比較的抵抗感を減らすことができた。自分たちの知っているスポーツ選手やスポーツチームなどが主語になっていることで，児童は面白味を感じていた。甲子園での金足農業高等学校の活躍から，関連記事を探して紹介し合う姿も見られた。

〈児童の活動の様子〉

２年「かたかなで書くことば」では，大館市立成章小学校の実践を参考にして，新聞に掲載されているかたかなで書くことばを探した。２年生にとって，新聞は情報量が多く，学習に活用するにはやや抵抗があるものであるが，かたかなの言葉を探す活動では，多くの活字の中からでも比較的見つけやすかった。外国の国や土地，人の名前や外国から来た言葉が多いことを確かめていた。

②理科の授業

６年「地球に生きる」の学習では，児童が自分たちがくらしている地球環境について，「水」「空気」「自分たちにできること」「その他（再生可能エネルギー等)」のテーマごとに分かれ，新聞記事を集めた。集めた後で記事に対する自分の考えをまとめた。最後に，互いに記事を紹介し合い，意見を交換した。

③日常的な活動から

６年生では，朝の会で日直がニュースの紹介を行った。日直の児童は，自分の気になった記事を切り抜き，読み込んで理解を深める。得た情報を友達が聞いて分かりやすいように自分の言葉で再構築して伝える活動を毎日継続した。

３．成果と課題

⑴成果

・図書室に子ども新聞コーナーを設置したことにより，児童がいつでも気軽に新聞を手にとって読むことができるようになった。新聞を購読していない家庭でも新聞記事に触れる機会ができた。

・廊下にＮＩＥコーナーを設置し，特集記事を紹介したことにより，児童が立ち止まってじっくりと新聞記事を読み込む姿が見られた。大きな紙面であるが，意外に児童の目に触れる機会が少ないことが分かり，情報を伝えて興味を喚起することができた。

・「ちょこっとＮＩＥ」コーナーを設置し，地域のニュースを知らせたことで，児童が興味を持つことができた。

・「ちょこっとＮＩＥ」コーナーを児童委員会の環境委員会に引き継ぎ，環境委員会の児童が興味を持ったニュースを掲示することになり，全校の児童にとって身近なニュースを掲示することができるようになった。

・各教科で，学んだことを新聞にしてまとめることは，児童が得た情報を自分の言葉に置き換えて友達や家の人に伝えたいという意欲の喚起につながった。

・朝の会で新聞記事を紹介することで，記事の文を自分の言葉で再構築して，友達に分かりやすく伝える経験を積ませることができた。

⑵課題

・新聞記事に書かれている記事の内容を読み取るには，継続して記事に触れる機会を設定する必要がある。そのために，日常的に児童が興味を持つような記事を見

つけ，児童に紹介していく必要があると考える。

・文章を読むことを苦手としている児童もいることから，抵抗感を減らすために新聞の紙面から選択して提示することが必要である。

「関わり合いの中で 高め合い 学び合う NIE の実践」
～比べて話すことを通して豊かな表現力を育てる～

大仙市立豊川小学校
教諭　加賀谷　秀　樹

１．はじめに

本校では，平成27年度からＮＩＥ教育の実践校となり，新聞を活用した学習・活動に取り組んできた。本校は全校児童５１名の小規模校であるため，授業では固定された集団の中で学び合うことが多く，自分の考えを言葉にして的確に表現することを苦手とする傾向にある。そのため，昨年度から「比べて話すこと」に力を入れ，的確に表現すること，豊かに表現することができる子どもの育成を目指してきた。昨年度の成果として以下の４点が挙げられた。

⑴「○○さんと（同じで，似ていて，違って）～です」のように，相手の発言を受けて比べて話すことができるようになってきた。

⑵自分の思いや考えを進んで話そうとしていることが，授業の振り返りなどから感じられるようになってきた。

⑶ベースとなる人間関係が良いため，安心して自分の考えを話すことができ，相手が何を伝えたいか，考えをじっくりと聞き，足りないところがある場合はそれを補う発言をすることができた。

⑷豊かな表現力を付けるために語彙を増やしたいという意欲が見られ，積極的に辞書を引いたり，本や新聞を読んだりすることができた。

そこで，今年度は昨年度のテーマを引き継ぎつつ「豊かな表現力」を「相手意識・目的意識をもって表現する力」「自分の思いをもって伝えようとする力」と捉え NIE を研究推進の１方策として継続実践することにした。

２．実践内容

⑴授業等での新聞の活用

①授業での活用

英語に触れる（外国語活動）

天気図・暦（理科）

新聞の基本構造を捉えて（社会科・総合的な学習）

副教材，スピーチのテーマ（国語科）

②家庭学習での活用

・気になる記事を切り抜いて家庭学習ノートに添付し，感想を記録。

・異なる記事の見出しを組み合わせてフェイクニュースを作成。

⑵新聞写真タイトルコンテスト

継続して行っている取り組みで今年で３年目。夏休みと冬休みの２回，３年生以下は親子で挑戦，４年生以上は自力で挑戦と部門を分け，「豊川小学校　写真タイトルコンテスト」を行った。興味をもった新聞写真を記事と一緒に切り抜き，自分なりの視点から写真のタイトルを考えるもので，短い感想も書かれていて，新聞記事のどの部分に着目したのかが分かり興味深い。

児童全員がコンテストの審査員となり，各部門から１人１作品ずつ良いと思った作品にシールを貼って投票していった。今年の夏は，金足農業の記事が多く，選んだ写真や記事が同じという作品が多かったが，選考する児童は，どれが最も良いか，タイトルの付け方を吟味しながら投票していた。

以下は，児童による冬休み明けの新聞写真タイトルコンテストの審査の様子。

どの記事に投票するかじっくりと選ぶ児童

時には選考理由の話し合いが始まることも

夏休み明けの新聞タイトルコンテスト受賞作品をいくつか紹介するとー。

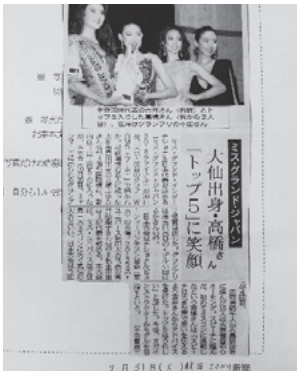
親子で挑戦部門　金賞
「負ける気がしねぇ！」

上の作品のように，地元出身の方が載っている記事を見付けタイトルを考えた児童がおり，新聞をすみずみまでチェックしていることがうかがえた。

⑶つながるタイム

月１回，２０分間の朝活動の時間に

親子で挑戦部門　金賞
「金農アザラシぞり はんぱないって」



自力で挑戦部門　金賞
「美人を育てた豊川」

行っている。「つながる」とは，同じ新聞記事でつながる，感想の交流でつながる，グループで話し合い，キーワードを共有することでつながることを通して，比べてつなぐ発言の仕方を身に付け，自他の考えを伝え合う意欲を高めることを狙いとしている。

つながるタイムで使用する新聞記事は，教師が児童の興味関心や読む力等の実態を考慮して選ぶ。

活動は以下の３ステップで実践した。

①記事の内容を理解する。

低学年…教師が解説しながら読み聞かせする。

中学年…教師が読み聞かせした後，児童が質問。質問されたことを受けて解説。

高学年…児童の１人読みの後，質問。質問を受けて教師が解説。

②感想をもつ。

新聞記事の気になった部分に赤鉛筆でサイドラインを引く。その後，１人１枚のホワイトボードに自分の感想を端的な言葉,例えばキーワード的なもので書く。

③感想を交流する。

３，４人のグループを作る。グループ内で一人ずつ順番に記事に対する感想を述べる。このときにホワイトボードを見せながら言葉をふくらませるようにして感想を言う。２人目以降は，「〇〇さんと同じで～」「似ていて～」「違って～」のように比べて述べるようにする。

新聞記事の言葉の意味や内容について質問

ホワイトボードを見せながら感想を述べる

感想交流の様子を他のグループに紹介

記事を選択中の６年生

中学年以上は，この後，友達の考えを聞いた感想も交流し合う。時間があればグループでの感想交流の様子を伝え合う。

学年末になると，新聞記事を教師が選ぶのではなく，児童が選択することもあった。

３．成果と課題

⑴成果

・授業等での新聞の活用では，児童が情報源として新聞を自ら活用し，社会の様々な出来事に関心を持つようになってきた。また，学習のまとめとしての新聞作りに取り組むときには，実際の新聞から学んだレイアウトや見出しの工夫等，表現方法を生かすようになった。また，伝えたいことを限られた分量にまとめる力もついてきた。

・新聞写真タイトルコンテストでは，家庭との協同，新聞記事を通じての親子の会話の増加，言葉に対する感覚・表現力の向上がみられた。

・つながるタイムでは，書いてあることのおおよその内容を把握する力，大切な言葉を見い出す力，相手意識をもって話す力，話す人の意図を考えながら聞く力がついてきた。

⑵課題

・新聞コーナーがマンネリ化してきたので，切り抜いての掲示や学習進度に合

わせた特集コーナーを作る等の工夫が必要。新聞を余り見ない児童への興味関心の喚起を図りたい。

・学習指導要領の改定に伴い，新聞活用の年間指導計画を見直す必要がある。

・各学年，学団単位で取り組んでいるそれぞれの活動を，全教職員が共有化し，改善を図っていく必要もある。

実生活と関連付け、生かすＮＩＥの実践

能代市立能代第一中学校
教諭　相　沢　晶　子

１．はじめに

本校は昨年、創立７０周年を迎えた地域の伝統校である。校是「覇気」を昭和４３年に制定した際、当時の校長は校是への思いを「将来いかなる人生の道を歩むにしてもその目的に向かって、自分で考え、積極的に実行しようとする意欲と、努力する姿をあらわしている。」と記している。以来、一中生の目指すべき姿と意気込みを示しており、受け継ぐべき精神として現在に至っている。

本校の特色の一つとして、学校都市活動が挙げられる。一般的には生徒会活動と呼ばれるが、本校では学校を一つの「都市」、生徒一人一人を「市民」と捉え、「学校都市憲法」に基づいた活動が成されている。これは校歌に歌われる「高く明るい自治精神」と合致するもので、一人一人が市民としての自覚をもち、より充実した学校生活を送るために自分たちの手で自分たちの考えを実行し、諸問題を自分たちの手で解決することを目標としている。本校では各教科の授業においても、生徒同士で討論をしたり、話し合ったりする中で、考えを深めたりする活動を積極的に取り入れ、授業においても自治精神の向上を図っている。

今年度の取り組みにあたり、３年生７８名を対象に調査をしたところ、右の資料のような結果となった。新聞に毎日触れられる環境にある生徒は半数ほどいるものの、日常的に読んでいる生徒はごくわずかだった。そのため、新聞の見方が分からない生徒も多いことが分かった。さらに、「情報はテレビやインターネット等のメディアで得る」が大半で、「活字が並んでいると読む気になれない」と訴えた生徒もいた。このような状況を踏まえ、あえて新聞に触れさせ、記事や写真、図などを資料として活用させたいと考え、社会科を中心とした実践を構想した。

本校は今年度、ＮＩＥ研究指定校となったのを機にこれまでの本校の新聞を活用した取り組みを整理するとともに、社会科（特に中学３年生）での実践を軸として、教科での活用を探ることとする。そして、その成果と課題を受けて２年目には、各教科で、最終年度には各教科の授業のほか、生徒会活動や学校行事等にもＮＩＥを取り入れていく計画である。

資料

新聞に関するアンケート（５月実施）

①家で新聞を購読していますか？
- 取っている　４１名（５３％）
- 取っていない　３７名（４７％）

②新聞を読む機会はありますか？
- 毎日読む　２名（　３％）
- 時々読む　２１名（２７％）
- あまり読まない　３８名（４９％）
- 全く読まない　１７名（２２％）

③新聞の見方を知っていますか？
- 知っている　９名（１２％）
- だいたい知っている　１３名（１７％）
- よく知らない　４９名（６３％）
- 全く知らない　７名（　９％）

２．実践内容

(1)社会科での取り組み

①３年公民的分野【政治の仕組み】

政治単元の学習の導入として、増税に関する新聞記事を取り上げ、必要性を議論する学習を行った。本時の授業は政治に関心を持ち、社会科が目指す

公民的資質の育成を図る目的で行ったものである。

本時は2019年10月の増税のメリット、デメリット、増税がもたらす影響などを新聞から読み取り、「賛成」「反対」「条件付き賛成」という立場に分かれて討論を行った。多面的・多角的な考察をするため、「高齢者」「障害のある方」という具合に、自分とは異なる立場に立ち、新聞から読み取ったこと関連付けて考察するようにした。

本時の取り組みにより、様々な立場の意見が政治に反映され、より良い社会の形成につながることをつかむことができた。そして、新聞記事には様々な視点からの情報が掲載されていることに気付き、自分の損得だけでなく、客観的に社会的事象を捉えることの必要性を実感した生徒が出てきた。

②３年公民的分野【地方自治】

本単元では､本市の「売り」を探り、地域おこしのプランを提案することを課題に新聞を活用した学習を行った。授業の事前のアンケートで、本市のイメージを聞いたところ、過疎化や少子高齢化などの問題点は挙げられるものの、長所や他に負けない良さは出てこず、生徒は地元の魅力や良さを認識していないことが分かった。そこで、少子高齢化や人口減少、大型店の進出による商店街の衰退といった、生徒が挙げた本市の課題を克服し、「地域おこしによって市の活性化を図る提案をする」ことを目標に、授業を展開した。

本単元では地元紙を活用し、地元の良さを探ることから始めた。生徒が新聞から良さを探し、取り上げた地元の「売り」には、「白神ネギやミョウガの生産が盛ん」「風の松原、白神山地などの観光の拠点になるものがある」「スポーツや文化的なイベントが行われている」などがあった。これらの「売り」と、本市の課題を関連させ、市の活性化に向けて、次のような提案がなされた。

能代市の活性化についての提案

- 田舎暮らしに憧れる人が増えていることから、空き家や空き店舗を活用して、観光の拠点として宿泊施設を設ける。
- 農産物の直売所を運営したり、定住をサポートしたりする体制を整える。
- 住民のためのイベントが多く行われていることから、１人暮らしの人も地域の和に入りやすいことをアピールして、１人暮らしの人の定住を図る。
- 少子高齢化を逆手にとり、「子どもの数が少ない分、手厚い教育ができる」ことをＰＲして、子育て世帯の移住を呼びかける。
- 希望する高齢者を募って、共働きの世帯の子どもを預かる体制を整える。

本単元で学習した内容は、先述の総合的な学習の時間の「ふるさとを創る会」につながる学習とも関連付けられ、新聞記事で見付けた課題を踏まえて、能代市の活性化への提言をする生徒も見られた。

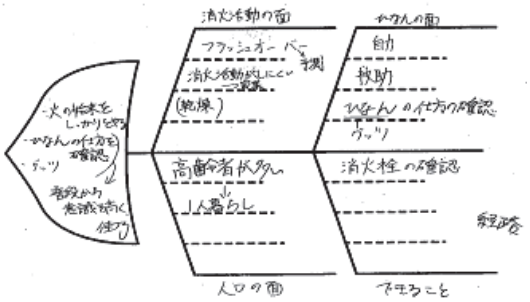
⑵防災教育と社会科

３年生社会科で、火災の記事を取り上げ、人口問題、環境、地方公共団体の役割りといった地理的分野や公民的分野の学習内容と関連付けながら防災について

の考察を行った。学区で起こった火災は、生徒にとって大きな衝撃であったようで、地域住民として真剣に考える姿があった。また、消防士を目指す生徒もおり、自分の将来と重ねて取り組む姿も見られた。

本時は火災について、地元紙や全国紙など、同じ火災について取り上げた各紙の記事を比較したり、関連付けたりしながら事実確認を行った。その後、火災の原因を立地や自然環境、少子高齢化などの視点から考察し、シンキングツールにまとめ、その内容から、火災を防ぐために必要なことや改善すべきことを話し合って提案した。

新聞記事を基に作成したシンキングツール

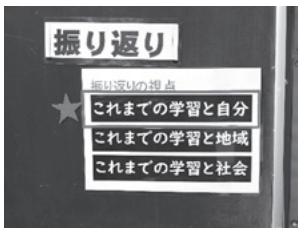


火災発生や被害拡大の要因を、消火活動の在り方、高齢化社会などの視点から考え、自分にできる対策を考察している。

生徒からは、新聞から読み取った火事発生の背景として、「少子高齢化により、地域の異変に気付きにくくなっている」「海沿いで風が強く、昔から大火の被害を受けてきた土地柄である」「古い家屋が密集している地域があり、防火対策が十分でない」といった意見が出された。

火災発生の背景や、これまでの学習内容との関連付けにより、地域の高齢者に対して普段から声かけを行っていく必要があること、昔から大火の被害に遭ってきた土地柄を踏まえ、消火栓等の設備を更に増やす必要があることなどの意見が出された。

学習の最後には「地域の一員として、防災にどう関わるか」という視点で振り返る時間を設定し、自分のこととして捉えられるようにした。



生徒の振り返りから

- 何か起こったときに助け合えるよう、近所の人同士のコミュニケーションを、普段からとっておかなければならない。
- 古い設備や家電から火事が起こることもあるので、定期的な点検や買い換えなどを考えることも必要だと思った。
- 自分の住んでいる環境をよく知ること、もし火災が起きたとき、広がりやすいのはどこか、危険箇所を把握しておくことが大事。そうすれば、いざというとき状況を判断して適切な対応ができると思う。
- 避難経路の確認やハザードマップの作成など、万が一に備えた対策を充実させていく。

(3)全校での取り組み

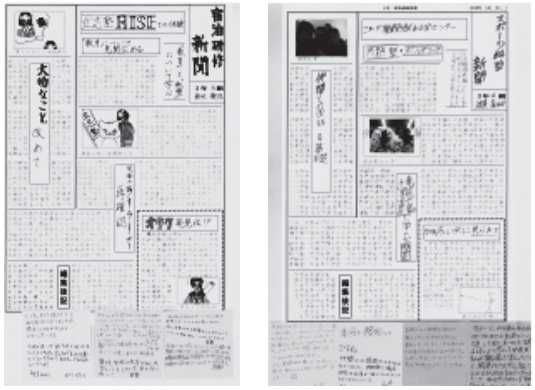
①新聞フロンティア

本校では様々な活動を「フロンティア」と称し、諸活動を通じて得た知識や技能を学校生活のあらゆる場面に生かす取り組をしている。ＮＩＥの指定を受ける以前から、本校では毎週金曜日に「新聞フロンティア」を実践している。当初は新聞を活用して読解力を高めることを目的としていたが、記事から読み取った内容について、自分の意見をもったり、提案をしたりして、思考力の育成を図っている。

②体験活動後の新聞制作

本校では各学年で実施する体験活動後、学んだことや得たことを新聞形式にまとめている。このうち、２年生は宿泊研修実施後、自身の体験を通じて学んだことを新聞にまとめた。職場体験に関するもの、宿泊研修全体を通じて学んだことなど、共通のテーマを設定し、それぞれの記事に大見出しや小見出しを付け、実際の新聞を意識して制作した。

最後には完成した新聞を生徒同士で交換し、他者の新聞から学んだことや気付いたことをコメントし合う活動を行った。自分が制作した新聞にコメントをもらうことは生徒の自信につながり、自己肯定感や自己存在感の高まりが期待される。



↑付箋には読んだ級友からのコメントが書かれている

３．成果と課題

【成果】

・記事の内容をじっくりと読むことで、情報の取捨選択や精査、事象の関連付けをする力が身に付いてきた。

・生徒にとって身近な記事を取り上げられることで、自分のこととして課題解決に取り組むようになり、主体的な活動が展開された。

・記事を読んで情報を得るだけでなく、写真に注目したり、地図から考察したりするようになり、社会科の資料として有効な教材であると実感した。

【課題】

・新聞に触れる機会が少ないために、情報の取捨選択を苦手とする生徒がいる。新聞を気軽に手に取り、身近なものにしていく仕掛けや工夫をする必要がある。

・新聞記事には、中学生にとって難易度の高い表現や語句が多々あり、辞書を使いながら読み進めてしまうと、内容をつかむまでに時間がかかってしまうことがあった。語釈を付けて渡すなどの工夫が必要である。

・特に政治的な内容については生徒だけでの読み取りが難しく、事前に説明したり、調べたりする必要があり、入念な下準備がなければ授業で展開しにくい。

新聞記事等を用いて，ものの見方・考え方を深めることができる生徒の育成を目指して

美郷町立美郷中学校
教諭　大　河　見　一

1．はじめに　～学校の概要と生徒の実態～

美郷中学校は，平成２４年４月に六郷・千畑・仙南の３中学校が統合してできた，創立７年目の学校である。平成３０年度の学級数は２０（特別支援学級を含む），生徒数は４７３名であり，県内では比較的規模の大きい中学校である。

本校では，美郷町教育理念である「豊かな人間性を育み,将来の美郷を担う人間の育成」という地域の願いを受けて，「健全な『心力』と『体力』を基盤にした『知力』・『地力（地域力)』の向上」という基本方針を掲げ，目指す生徒像を明らかにして日々の教育活動に取り組んでいる。

心力を鍛える	「切磋琢磨しながらも互いのよさを認め合う生徒」
体力を鍛える	「健康的で基本的生活習慣が身に付いている生徒」
知力を鍛える	「生き生きと目を輝かせ，真剣に学ぶ生徒」
地力を鍛える	「美郷を愛し，美郷に貢献する生徒」

↑「目指す生徒像」

本校の生徒は全体的には素直で，諸活動に真剣に取り組むことができる。また，与えられた役割を果たそうと真面目に取り組む姿が様々な場面で見られる。反面，大人数の中で学習・生活することから，自分らしさを発揮できずにいる生徒もいる。他の人の目を気にして，積極的に発表できなかったり，分からないことをその場で質問できなかったりするため，主体的に学ぶ姿勢は十分に定着していないという課題も見られる。

2．実践内容

1　新聞閲覧コーナーの増設

昨年度から，「まずは新聞を生徒の身近に」という考えから，生徒玄関ホールに「新聞閲覧コーナー」を設け，常に複数の新聞社の紙面に親しむことができるようにした。

今年度は秋田魁新報，読売新聞，朝日新聞，毎日新聞，産経新聞，日本経済新聞の６社の購読が可能となり，同じ題材を取材した各社の記事を読み比べができる状況となった。

さらに，ホールから遠い南棟で学校生活を送る２年生に配慮して，南棟２階にも新聞の閲覧スペースを確保した。利用できる場が増えたこともあり、朝読書が始まるまでの時間，昼休み，下校バスの待ち時間など，生徒が利用する時間帯にも多様化が見られ始めている。

↑南棟閲覧コーナー

2　美郷町の関連記事や卒業生の活躍を掲載した記事の掲示

昨年度から「オラほの町が載ってるよ！」という掲示コーナーを設け，美郷町に関わる記事を，広報委員会が中心と

なって紹介していく取り組みを始めた。今年度は「私財を投じた復興の道」を歩んだ郷土の偉人「坂本東嶽」に関わる記事や，美郷町が推進しているタイ王国との交流に関わる記事などが紹介されている。

↑「オラほの町が載ってるよ！２０１８」

生徒にとって身近な新聞資料が掲示されていることにより，生徒が自分と地域社会との関わりに気付くとともに，郷土の歴史や文化，地域に住む人々の営みなどに目を向けるよい契機となった。また，総合的な学習の時間における地域教材としての活用事例も見られた。

	探究課題	テーマ
一年	美郷の歴史や文化	私の美郷～ふるさと再発見～
二年	美郷の現状と地域の将来	美郷の今～つながる美郷の宝～
三年	大田区と美郷の関係や外から見た美郷の現実	美郷の未来～美郷の輝きを発信～

↑本校の「総合的な学習の時間」の系統性

さらに，今年度は，高校総体等における先輩たちの活躍を取り上げた，「美郷魂，ここにあり」と銘打ったコーナーを立ち上げた。先輩たちの活躍の様子に関心をもつ生徒が多いようで，足をとめて記事に見入る姿が多く見られた。

↑「美郷魂，ここにあり」

体育委員会を中心に推進してきている，「走る美郷」の伝統を継承しようとする取り組みもあり，本校の生徒たちにとってはよい刺激となっている。

３　中高生新聞購読の継続

本校では，昨年度から毎週金曜日の朝読書の時間（１５分間）を中高生新聞購読の時間にあてている。「読売中高生新聞」は，Ａ３版より一回り小さいタブロイド版で，読みやすい。ページ数も豊富で，内容も多彩である。様々な家庭環境の中で生活し，社会的事象との出会いの場が少ない中学生にとって，様々な社会の動向を捉えることのできる具体物であり，非常に優れた教材である。新聞を購入しない家庭が珍しくなくなった昨今においては，町の協力によって全校生徒に新聞が配布されるということは非常に幸運なことである。

新聞に目を通した後，関心をもった内容を選択し，「みんなでＮＥＷＳＰＡＰＥＲ！」という感想カードに自分の考えを記録させている。昨年度から，週一回じっくり新聞に目を通す時間を継続していくことを全校で行っている。また，自分の考えは三文以上の文を用いて示すという「三文記述」を推奨していくことにも取り組んできた。１１月に行われた

←「みんなでＮＥＷＳＰＡＰＥＲ」

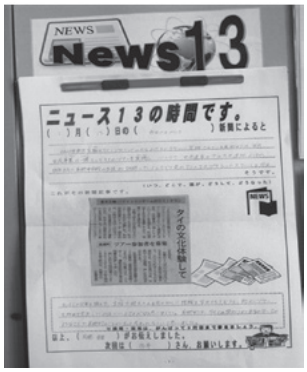
☆広い視野から社会的事象を
☆自分の気付きや考えたこと

第２回生徒総会において，「三文を書くには記入欄が狭いので広くしてほしい。」という要望が出されるなど，活動意欲の高まっている生徒が少しずつ増えている様子がはっきりと見てとれた。

４　「ニュース発表」の推奨と学年単位による取り組みの拡充

本校では，朝の学活で「今朝のニュース」を紹介する活動を推奨している。クラスに応じて，日直または日替わりのニュース係などの役割分担を決めて取り組んでいる。生徒全員に発表の場を確保し，その内容を教室内に掲示することで，友だちがどのような新聞記事に関心を示しているのか，記事を通じてどのようなものの見方・考え方を示しているのかを見取ることができるようになったことは意義深いと考えている。

さらに，今年度は，１年生においては「ニュース発表」を行うこととした。学年単位にまで拡充することができたことで，「朝の会の中ではなかなか時間がとれない」「どのように指導したらよいのか分からない」など，昨年度課題であった学級担任の負担感がなくなり，他の学級の動向に学ぶ姿勢も見られるようになった。加えて，「ニュース発表」に対する質問を日常的，継続的に行うことを意識化させた学級が見られるようになり，質問をする生徒をアトランダムに選ぶためのの創意工夫も見られた。このように，学級担任一人一人が，新聞と学級の生徒たちとの出会いの場を大切にしようという意識が高まった。また，指導のノウハウが共有化されたことも大きな成果と考えている。



↑１年３組の「ニュース発表」コーナーを例に

５　「新聞づくり」に挑戦

本校では，以前から広報委員会が主催して年４回学級新聞を作成している。学級の紹介や合唱祭に向けた学級の取り組みなど，その時期にふさわしいテーマを設定した上での取り組みである。

↑　学級新聞コーナー「みんなの新聞勢揃い」

今年度は学年単位で実施している「総合的な学習の時間」の中で，新聞作成に取り組む試みを行った。

本校の所在する美郷町には，名水百選にも選出された「清水の郷」があり，小正月行事「竹うち」が有名な六郷地区，大自然に囲まれたラベンダー園や，国指定史跡・払田柵のある千畑地区，後三年合戦の戦場となり，地元企業の代表ともいうべきヤマダフーズを有する仙南地区

←１年生が作成した新聞の例

☆美郷町への提言も

と，歴史や伝統の息づく地域教材が溢れている。

さらに，今まさに地域社会で活躍している「みさと働きびと」の方々との交流の場も計画的に設定されており，生徒が地元の実情や未来，自分自身の将来に対するものの見方・考え方を深めることのできる学習の場が数多く設定されている。そのまとめとしての新聞の活用である。

6　2018年度読売新聞秋田県版「ジュニアリポーター」の活用

読売新聞秋田県版では2018年度に，県内在住の若者が地域の話題を発信する「ジュニアリポーター」という企画を実施している。

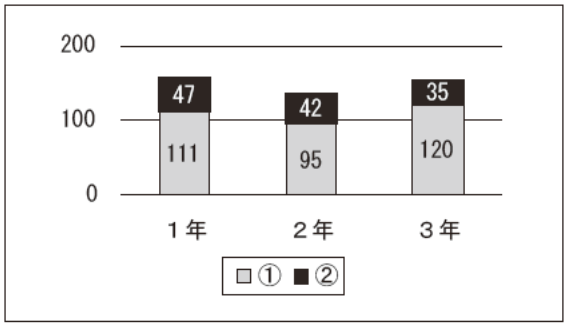
本校では，中学校２年生の３名が，「除雪ボランティアやるぞ！」と題した新聞コラムを掲載させていただいた。受信する立場から発信する立場になったことで，情報の捉え方が変わり，伝えるときの正確性や客観性が身に付いたようである。

↑２月１９日の
読売新聞

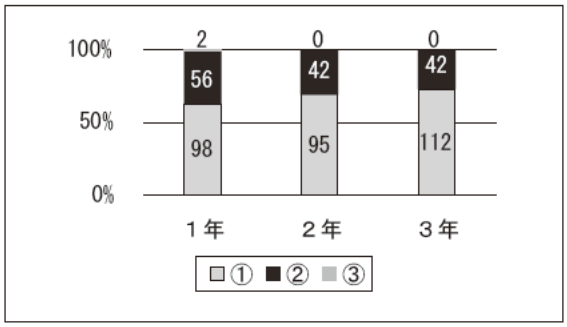
３．アンケート結果から

年度末に，欠席者を除いた生徒４５０名を対象として，今年度のＮＩＥの実践に対するアンケート調査を行った。結果は以下の通りである。

１．あなたの家では新聞を購読していますか。
①購読している　②購読していない

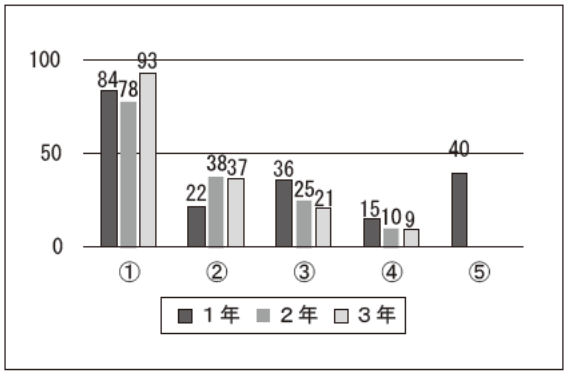


２．新聞を読む活動に対する関心が高まりましたか。
①関心が高まった　②あまり変化はない
③関心が少なくなった



３．関心が高まった理由として，有効だったと思う取り組みは どんなことですか。
①「中高生新聞」を読み，感想をまとめたこと
②印刷室前や南棟に閲覧台が置かれていること
③いろいろな新聞社の新聞が見られたこと
④ふるさと美郷町や美郷中学校に関する新聞が掲示されたこと
⑤クラスの朝の会などで，新聞を紹介する場面が確保されたこと

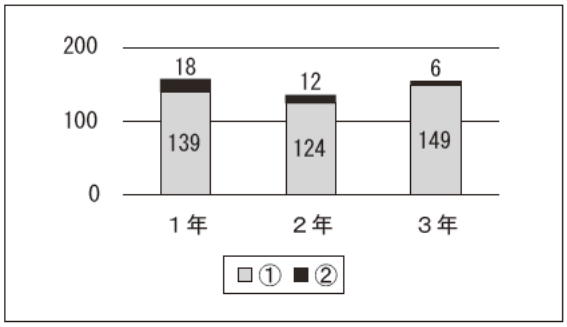
（１年１５６名のみ）



4．「中高生新聞」に関わる一連の活動は，自分のために役立ったと思いますか。

①役立ったことがあると思う

②役立ったことがあるとは思わない



5．役立ったと思う理由はどんなことですか。

①家で新聞を購読していないので，世の中のニュースを知る機会になった

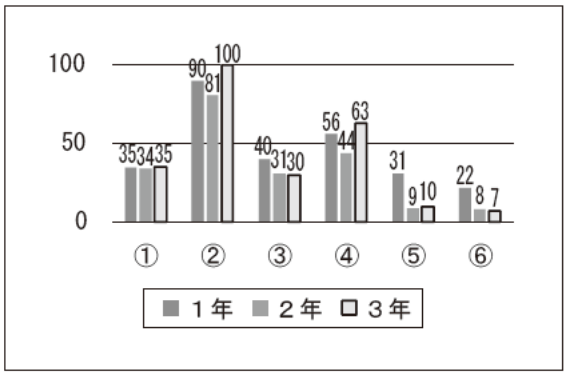
②新聞は購読しているが，家では目を通す機会が少ないので役に立った

③感想を書く習慣が身に付いたことで，書くことに抵抗が少なくなった

④感想を書く習慣が身に付いたことで，自分の考えを深めることができた

⑤友だちの感想に触れることで，自分の考えを深めることができた

⑥友だちの感想に触れることで，書くことの技能をレベルアップできた



4．成果と課題

○　成果

1　新聞閲覧コーナーの増設により
- ○同じ題材を取材した各社の記事を読み比べる生徒の姿
- ○生徒が利用する時間帯の多様化

2　美郷町の関連記事や，卒業生の活躍を掲載した記事の掲示により
- ○地域社会との関わりに気付き，地域の人々の営みに目を向ける契機
- ○地域教材としての活用事例

3　中高生新聞購読の継続により
- ○社会的事象と出会い，様々な社会の動向を捉える場
- ○感想を「三文記述」で表現する活動への意欲の高まり

4　「ニュース発表」の推奨と学年単位による取組の拡充により
- ○他の学級の動向に学ぶ姿勢
- ○学級担任の意識の高まりや，指導のノウハウの蓄積

5　「新聞づくり」に挑戦する取組により
- ○歴史や伝統の息づく地域社会を焦点化
- ○地元の実情や未来，自分自身の将来についての見方・考え方の深まり

6　読売新聞秋田県版「ジュニアリポーター」の活用により
- ○発信する側としての事象の捉え方
- ○伝える際の正確性や客観性に対する配慮

●　課題

1　各学年の取り組みの成果の共有化

今年度までの活動を振り返ると，学級や各学年による取り組みが主たる活動を占めている。来年度に向けて，それらの取り組みの成果を共有化することで，来年度の活動の見通しを明確にしていきたい。

2　学級・学年の枠を越えた意見交流の場

体育館以外に，学年や学級の生徒が一堂に会して学習することのできるスペースがない本校は，学年集会以上の規模の活動が日常的には実施できないという悩みを抱えている。

来年度は，新聞記事の中から一つのテーマを定め，学級・学年の枠を越えた意見交流の場を設けたい。

一流の学び手を育むＮＩＥ

横手市立平鹿中学校
教諭　星　野　正　博

１．はじめに

本校では「めざすは一流！一歩一歩を確かめながら」の合い言葉の下，主体的に学び，成果を実感して次の学びにつなげられる生徒の育成を目指し，教育活動に取り組んでいる。

ＮＩＥでは次の３点を目標に，昨年度に引き続き実践を積み重ねてきた。

・新聞に親しみながら豊かな情操，豊かな語感を育む。
・目的に応じて必要な情報を見付け，資料を効果的に活用する力を育てる。
・活字に親しみ，語彙を豊かにする生活習慣を付けさせる。

２．実践内容

⑴新聞を読みたくなる，活用したくなる環境の整備

ギャラリースペースにある新聞台

教室から職員室や理科室，体育館に行くときに通るギャラリースペースに昨年度から複数の新聞を閲覧できるコーナーを作っている。特に上級生の中に，移動教室の際によく新聞をめくって記事をチェックしている生徒が多い。最大７紙が置かれるため，トップ記事や同じ事柄の取り上げ方の違いなどにも目を向けやすい。

また，各学年棟の廊下にも新聞閲覧台を置いて，「新聞が身近にある環境」を作っている。

各学年棟にある新聞台

校長室前には，「てつやが読む!!」と名付けた特設コーナーを設置してある。これは，校長先生が旬な記事を素敵なイラストと鋭い切り口で紹介する人気のコーナー。今年で４年目なので，特に２，３年生は楽しみにしてよく見ており，記事の内容について校長先生と談話している姿もよく見られる。

校長先生が選んだ記事を紹介する
「てつやが読む!!」のコーナー

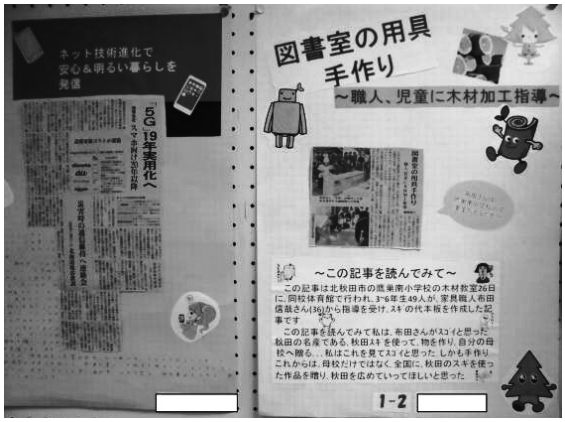
同じ記事を新聞によってどう報じているか考えさせるもの

「ＳＮＳへの投稿」について，新聞記事と四コマ漫画を紹介したもの

⑵各教科の授業での新聞の利活用

①技術科での取り組み（１年生）

「情報」「ものづくり」というキーワードで新聞から気になった記事を見付け，感想も入れてポスターにまとめた。

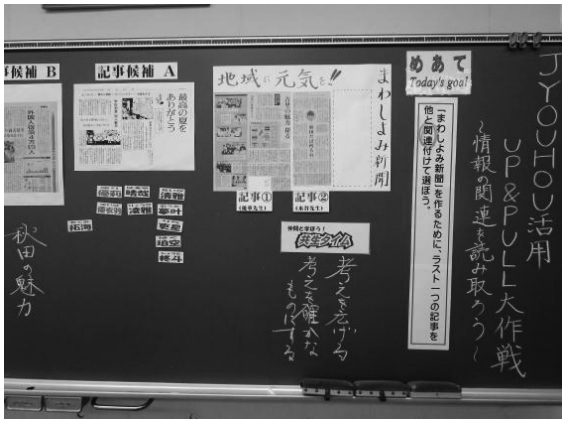


技術科で作成したポスター

②国語科での取り組み（１年生）

「まわしよみ新聞」作成のために残り一つの記事をどれにするか決めるため，他二つの記事や見出しとの関連について話し合う学習を行った。「関連付け」というキーワードをもとに，生徒が主体的に話し合うことができた。また，見出しと記事①，記事②をトータルに見てそれぞれの「関連」を考えることができた。

また，その後の個人での学習では，事象ではなく「思いやり」「夢」「成長」などをキーワードにして，幅広い内容の記事から情報収集ができた。



自分の主張のために適切な記事を選ぶ学習

③国語科での取り組み（３年生）

記事の読み比べを行った。生徒は全体の話し合いを通して，新聞記事を読み比

べる際には，出来事を見る視点の違いだけでなく，新聞社それぞれの立場や，主張にも目を向けることが大切だということに気付いていた。本時の終末では，新聞記事を評価する視点が増え，より多角的に新聞を読み比べることができた。

また，本時で身に付けた視点（視点・テーマ性・メッセージ性等）を使って，単元の終わりには全員が読み比べ新聞を作成することができた。

同じ事象を扱った記事の読み比べ

⑶授業以外での新聞の利活用

毎週火曜日の朝の時間に，読売新聞のコラム「編集手帳」を視写して感想をまとめる「一流シート」の取り組みを全校で実施している。学級の代表２名分をギャラリースペースに掲示，残りは班ごとに廊下に掲示した。書くスピードのアップ，字を丁寧に書く意識付けがなされ，一流の文章に触れて語彙を豊かにするよい機会となっている。

感想

鍵フィーバーを巻きおこし秋田，東北の勇気"にもなりました。甲子園での金足農業の戦いぶりに2ランスクイズ逆転3ランホームランなどといれば感動をあんでくれました。強校の金足農業で決勝まで残るんてだれも思ってなかったと思います。だがかしこれが金農旋風だ!!

野球をやる人として毎日exciting(ワクワク)したね。甲子園の舞台、その通り。金足農業高校（秋田）の選手たちのけぞらせながら校歌をうたうのつくだ物。

野球勢は言うまでもなく、農業の名連覇は史上初。金足ならば東北のつく高校としても史上初だ。

大阪桐陰の優勝なら2度の春夏きょうは何の日になるだろう。

"ダンス"といい、全国にファンを広げたことだろう◆決勝のいい、おなじみになった元気なはらはらドキドキの勝ちぶりとぎりぎりはらドキドキの逆転劇で、準々決勝は土壇場の逆転劇で、準々決勝は土壇場の逆転劇で舞台にコマを進めた。3回戦、占める県立の農業高校が決勝の会の学校ではない。地元の子で え、有望選手の集まりやすい都ちである◆かつての強豪とはい

※有望……将来ちっぱに，または，よくなる見込みがあるようす
※コマを進める……次の戦いなどに勝ち進む
※土壇場……ものごとの決着がつく最後の場面

氏名：

一流シート

横手市の「新聞の日」以外の金曜日も「平鹿中新聞の日」として，朝読書の代わりに新聞を読む時間にしている。また，自分が決めたテーマに合った記事や興味関心のある記事を切り抜き，ファイルに保管。10月の学校祭に合わせて，全学年で「切り抜き新聞」を作成した。選ぶ記事の内容や主張，レイアウトなど学年が上がるほどレベルが上がっていた。

３年生の作成した切り抜き新聞

新聞を使っての１分間スピーチを「みんなのニュース」と称し，全校統一したシート（紹介する新聞記事を貼り，内容を要約して自分の意見を書く）に書かせて，学年棟に掲示している。

「みんなのニュース」掲示板

ほっとけんこうＮＩＥ

養護教諭が生徒の目につく公衆電話前に「ほっと　けんこう　ＮＩＥ」コーナーを設置。健康に関わる新聞記事や生徒の感想を紹介した。

⑷今年度の特色ある取り組み

地元で働くこと考えたい

ジュニアリポーター

平鹿中生 社会人から学ぶ「夢講座」

横手市の平鹿中学校の1年生81人が11月8日、地元で活躍する社会人3人を招いて、仕事の内容や思いを聞く「夢講座」が開催された。

講座は進路や生き方を主体的に考えるキャリア教育の一環として、10年ほど前から総合学習の中で実施している。

講師3人のうち、「フォトヒカリエ」代表のカメラマン・小国信一さんは結婚式やイベントの撮影、卒業アルバム制作などを行っている。栄養教諭の三浦朋子さんは同中など5校の学校給食の献立を考え、準備している。機械部品会社「アスター」社長の本郷武延さんは新型コイルを国内外に売り出そうとしている。

中学生に望むことについて、「社会で大事な力は『聞く力』と『自分のことを伝える力』。二つの力を大事にしてほしい」と小国さん。三浦さんは、「おいしそうに食べる顔を見るのがやりがい。自立するため、みそ汁など最低限の食事は作れるようになっ

夢講座では3人の講師が仕事の内容や生き方について語った

12月１日の読売新聞32面

今年度，読売新聞秋田県版の「ジュニアリポーター」に年４回の寄稿をした。執筆は図書委員が担当。記事の基本である５Ｗ１Ｈだけでなく，記事の内容を膨らませる要素や写真を撮影する際のポイントなども事前にアドバイスしていただいた。新聞に親しむだけでなく，情報を発信するという得がたい体験ができた。

生徒たちから，今年度で定年退職される校長先生に学校賞をプレゼントしたいとの提案があり，日本新聞協会主催の「第９回いっしょに読もう！新聞コンクール」に全校生徒が取り組んだ。その結果，学校としてのこれまでのＮＩＥへの取り組みも評価され，見事、優秀学校賞を受賞した。

３．成果と課題（成果○，課題●）

○新聞に触れる機会を多くしたことで，各学年棟廊下やギャラリースペースの新聞を読む生徒が増えた。

○「一流シート」（新聞コラムの視写と感想記入）を継続してきたことで，社会に目を向けたり，話題になったことについて友達との会話が増えたりしている。また，語彙が豊かになったり，表現を学ぶ場になったりしている。

○この紙面で紹介した以外にも理科，社会科，英語科などで各教科に関わる新聞記事を紹介するコーナーを設置している。このように積極的に新聞記事を利活用しようとする雰囲気が高まっている。

●「ＮＩＥの年間指導計画」を各教科の先生方の協力を得て作成しているが，なかなかその通りに実践できていない。

→その年度の単元の組み方等によって取り組みが変わってくるので，長期休業に年間指導計画の見直しを図る。

●ＮＩＥをより生徒主体のものとしたい。

→来年度から，学年棟，ギャラリースペースの新聞の差し替えなどを広報委員会の常時活動に組み込む。

●必要な記事がなかなか見つからない。（新聞を購読していない家庭の増加）

→学校で切り抜き新聞情報誌を定期購入していく。

夢に向かい　主体的に学び　互いに高め合う生徒の育成
～『他者』との学び合いによって，学びを広げ，深めるために～

由利本荘市立由利中学校
教諭　猪　股　真由子

１．はじめに

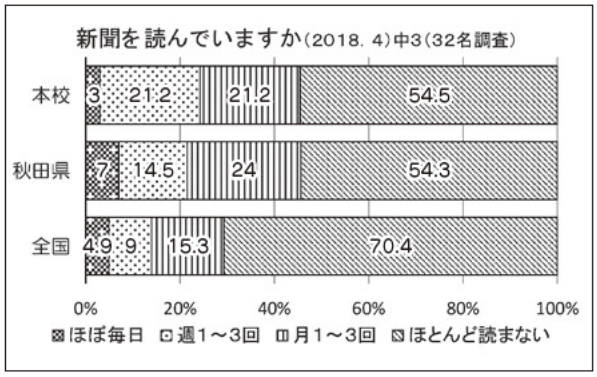
由利地域は，由利本荘市のほぼ中央に位置し，子吉川の流れに沿った平野部に集落や水田が広がる自然豊かな地域である。地域住民や保護者が学校教育に寄せる期待は大きく，協力的である。全校生徒９９名は幼少のころから共に過ごしてきており，温かな地域に育まれ，成長している。

２０１６年度までの４年間，日本新聞協会のＮＩＥ実践指定校として実践を重ね，その実践を２０１７年，そして今年度と引き継ぎ，継続してきた。学校には新聞を自由に手に取れる環境も整っているが，新聞を手に取っている生徒は多くはない。

全国学力・学習状況調査（４月）の生徒質問紙によると，新聞を毎日読む生徒は，秋田県，全国を下回り，新聞をほとんど，または，まったく読まない生徒が５４．５％（３年生３２名回答）もいる。

また，総合学力調査（４月）の意識に関する調査では，「新聞に書かれていることについて家の人と話す」生徒は２９．４％（２年生３４名回答）で全国を２．９％，由利本荘市を９．０％下回る。

そこで，今年度も「新聞に親しむ」ことから始め，「新聞のよさを味わう」機会を設定できるように意識して，ＮＩＥを推進してきた。



２．実践内容

⑴新聞記事から始まるトークタイム

５月から７月まで水曜日を基本として週１回の朝読書の時間に新聞記事を読む時間を設定し，記事を読み，自分の考えをまとめた。そして，その考えを帰りの会前の補充学習の時間に提起し，続けて意見交換をする時間を設定した。

①双方向のやりとりをする場の設定

昨年度までは，新聞記事に対する考えをスピーチすることを主とし，それを受けて感想発表をしていたが，今年度は，研究の重点の一つである双方向のやりとりを意識し，トークタイムを設定した。

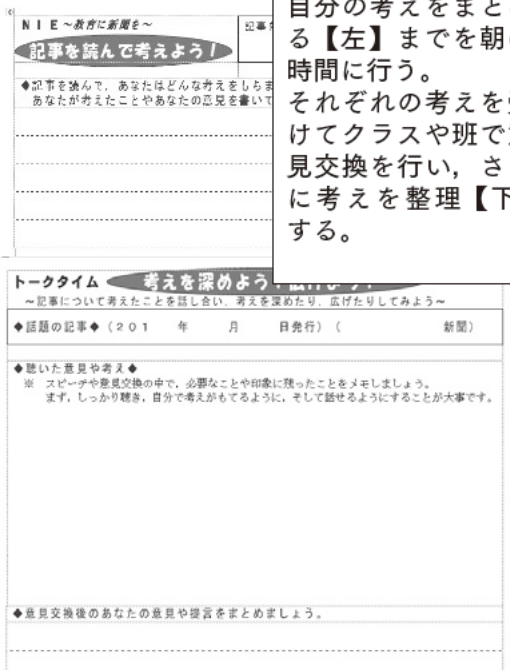
スピーチを聞いて考えたことを述べ，さらにそれを受けて話し合うことで『他者』と学び合い，新たな考えに気付いたり，自分の考えを深めたりすることができるようにした。

②新たな考えとの出会いとなる記事選定

幼少のころから固定化された人間関係の中で生活する生徒たちは価値観が似ていることも少なくない。そこで，異なる視点や考えに出会えるような記事を選び，記事を通じて『他者』と学び合えるようにした。

第１回は「制服どう思う？本音トーク」(読売新聞2018/4/1)を取り上げた。

記事【上】を読み，自分の考えをまとめる【左】までを朝の時間に行う。
それぞれの考えを受けてクラスや班で意見交換を行い，さらに考えを整理【下】する。



同年代の意見記事であり，読みやすい内容であった。そして，賛同できる意見もあるものの，自分たちは思いつかない視点の意見もあり，考えを広げたり，深めたりするきっかけになった。

第３回の「私たちはいつ『大人』になるんだろう？」（さきがけこども新聞2018/5/20）の記事は，自分の中の揺れ動く考えを自覚するきっかけになった。改めて自分なりに考え，さらに意見交換することで，新しい考えに気付いた生徒もいれば，自分の考えが明確になった生徒もいた。

③新聞への関心を引き出す記事選定

ニュースなどに合わせて「火山は巨大なスポンジ」（さきがけこども新聞2018/6/24）を取り上げ，新聞記事から新たな知識を得られることや毎週日曜日など定期的な特集記事があることに気付かせ，新聞を手に取るきっかけとなるように狙った。

他にも地域に関係する記事など関心の高い内容を選ぶなどして，期間が終わっても自分から新聞を手に取る生徒を増やしたいと考えているが，なかなか難しい現状である。

④トークタイム後の振り返り

トークタイム後に，自分の意見や考えの変化について整理し，提言をまとめた。

新聞記事から離れ，友人の意見や以前に聞いた話，学んだことを結び付けて考えられた生徒もおり，学びの深まりが感じられた。

⑵いっしょに読もう！新聞コンクール

７月までのトークタイムのまとめとして，夏季休業中に「いっしょに読もう！

新聞コンクール」への応募作品を作成した。

学校で紹介した記事とトークタイムをもとにして作品を仕上げた生徒や学校で紹介した記事について家族と意見交換した生徒，記事の選定から自分で行った生徒と様々であった。

全校生徒９９名中８７名が応募し，昨年度に続き，学校奨励賞を受賞した。今年度は，個人の奨励賞も受賞することができた。奨励賞受賞作品は学習通信に掲載し，全校生徒で共有した。

受賞作品で取り上げた記事は秋田魁新報に毎週日曜掲載の内館牧子さんのコラムから「真夏の『騒音』」（秋田魁2018/8/19）だった。

祭りの音や子どもの声を「騒音」とする考えに驚き，祖母に話すと，祖母も人を不快にしようと故意に出される音は「騒音」と感じるが，祭りの音や子どもの声がなくなるのは残念だと語る。その考えを聞いて，「不快にしかならない騒音」と「幸せをもたらす騒音」の二つがあると考えるようになる。そして「騒音」について調べるうちに「ハッピー・ノイズ」という言葉に出会ったという内容である。「ハッピー・ノイズ」は少子化問題を抱えるドイツが子どもの声を指した言葉である。

「騒音」は受け手側が決めている。今，自分が騒音と感じている音も「騒音」なのか考え直す必要があると考え，不平不満を言うより，受け手が広い心で受け止める方が幸せをもたらすのではないかという提言で作品は結ばれている。

受賞した作品以外にも，身近な地域に戦時中に疎開してきた子どもとの交流を伝える新聞記事から，戦時中に自分のことを後回しにしてまで疎開児童をもてなしたことへ感動したという作品もあった。内閣の決定事項とはいえ，自分の生活も苦しい中で６人もの疎開児童を受け入れたのは，そうとうの覚悟であり，自分の食事を後回しにしてまでもてなしたのは日本人の心だという父の意見を聞き，元疎開児童が戦後５０年後に桜の苗木を贈ったのは，５０年経っても忘れられないほどの恩を感じていたからだと感じ，そうした結び付きを記念碑として残し，伝えていく大切さを訴えていた。

また，シリーズ「１４歳の君へわたしたちの授業」から，萩本欽一さんの「夢を語りいじめ撃退」の記事を取り上げ，いじめ防止について話し合った学級会と結び付け，母と意見交換したという作品もあった。いじめられる側にも問題があるという意見には絶対に反対だと強く思うようになり，「辛い目に遭うと，その分いいことがある」という言葉から勇気をもらって一歩を踏み出したいと決意を述べていた。

夏季休業を利用して，普段の何気ない生活では語り合わない内容を新聞記事のおかげで語り合う機会がもてたことは貴重な経験になったと感じている。

⑶新聞作成の視点を生かしたまとめ

①新聞作成講習会

８月２７日に秋田魁新報社の齊藤敦氏を講師に新聞作成講習会を行った。今年度は，まとめ新聞の作成に活用することは当然とし，知ったことや学んだことを端的に述べる力の育成も目指して「見出し作成」をテーマに講習会を行った。

見出しは１０文字程度で「５Ｗ１Ｈ」がパッと見て頭に入るようになっていること，そして情景が浮かぶような見出しになるように『いい言葉』を選ぶセンスが問われることを，実例を挙げ

て示してもらい，実際に記事と写真から見出しをつくる実習を行った。

記事の中の言葉を使うことや読んでみて言葉の調子を整えることなどのコツを伝授してもらい，金足農業の甲子園での活躍を報じる記事につける見出しを考えた。そして，生徒の案をいくつか取り上げて，誤解のない表現にすることや熟語を使って文字数を減らす工夫などを学んだ。

実際の見出しを知らされ，言葉選びの工夫を発見した生徒が多く，今までと違った新聞の見方をするきっかけにもなった。

②総合的な学習のまとめ新聞作成

総合的な学習の時間で学んだことを新聞形式にまとめている。１年生は，身近な人へのインタビューと宿泊研修での職場訪問の内容を合わせて自分自身の職業観について新聞にまとめた。２年生は，４日間の修学旅行で学んだことを新聞形式にまとめている。

複数の学びを記事に分けて整理しながら，全体を通して編集後記の形で学びを統合することができるところが新聞形式のよさだと感じている。

⑷ＮＩＥコーナー

①学年ごとのトークタイムの足跡

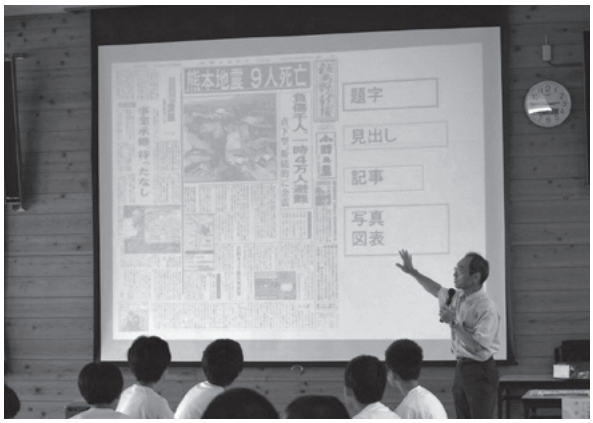
教室や学年ホールにコーナーを設置し，新聞記事を紹介し，トークタイムで出た個々の考えなどを掲示した。

②新聞記事や新聞に関する知識紹介

図書室前に学校や地域に関する記事や，新聞作成講習会の内容をもとにした新聞に関する知識を掲示している。

③新聞閲覧スペース

図書室前のＮＩＥコーナーには，１週間分の新聞各紙を備え，新聞を自由に手に取れるようにしている。



秋田魁新報社 齊藤 敦氏から新聞の構造と見出し作成の講習を受ける。【上】実際に作成した見出しを紹介し，見出しの言葉選びについて，さらに学んだ。【下】

３．成果と課題

新聞の構成，取材の仕方，見出し作成と内容を変えて継続してきた新聞作成講習会がまとめ新聞の作成に生かされている。

「いっしょに読もう！新聞コンクール」に向けた新聞記事をもとにした意見交換が非常に有意義だった。

紹介した取り組み以外に国語科や社会科，技術科，道徳の時間でも数回，新聞記事を取り上げているが，生徒にとって新聞が「自分から手に取るもの」にはなっていない現状がある。

社会の問題に関心を持ち、視野を広げ自分の考えを持てるようになるために

秋田県立六郷高等学校
教諭　猿　橋　知　恵

1．はじめに

本校では昨年度も、ＮＩＥの実践校として活動してきた。しかし、今年度は熱心に取り組んでいた教員２名が一度に転出してしまったため、辞退したいというのが正直なところであった。しっかりとした目標設定のもと実践していた昨年度までの活動のようにはいかず心苦しい。

ただ、便利な情報ツールを手にしていながら、自分の興味のあること以外には全く目を向けようとせず、狭い世界に生きている生徒が多い中、なんとか世の中のことを知って関心を持ち視野を広げてほしい、自分なりの考えを持ってほしいという願いが教師にはある。今年度各教科・各教員が何らかの形で新聞を使った例を挙げて、報告に代えさせていただきたい。

2．実践内容

⑴週末課題・長期休業課題

世の中のさまざまな動きや情報に触れ、自分なりの考えを持てるようにさせたいと、各教科の週末課題や長期休業課題に新聞記事が利用された。教師が選んだ記事を読ませる課題と生徒自身が関心を持った記事を切り抜く課題がある。

〈国語〉

週末課題として、「ゲーム依存症」「日中の互いの国の印象に関する共同世論調査」「日本語の新しい表現に関する世論調査」「ゲノム編集技術を使った双子の誕生」などの記事を提示し、テーマについて考えたことを書かせた。

また夏季休業の課題として、関心を持った記事の切り抜きをさせた。

〈理科〉

科学関連記事を切り抜き、感想を書く週末課題を課した。生徒が興味を持つ話題は、マイクロプラスチックの問題等の環境問題が多かった。

〈１年社会福祉基礎〉

ゴールデンウイークと夏季休業の課題として、関心を持った記事について要約させ、感想を書かせた。記事内容の指定はなかったが、高齢者福祉・障がい者福祉・児童福祉に関する記事や地域の福祉に関わる記事を選ぶ者が多かった。

⑵各教科の授業

〈３年国語表現〉

「新元号を考えよう」

時代の節目に巡り合わせた生徒たちに、生まれ育った平成と高校卒業とほぼ同時に迎える新しい時代について考えてみてほしいと思い、ちょうどあと１年となる時期に実施した。以下のような内容である。

①新聞の見出しの「来年５月に『○○』から（○○○）に変わる」を大きな紙で提示し、空欄に入る言葉（平成・新元号）を考えさせる。

②配付した新聞記事から、「元号とは何か」「『平成』という元号にはどのような意味がこめられているか」を読み取る。

③「平成」はどんな時代だったかを、自分の記憶やイメージで書いてみる。

④提示した「平成」の主な出来事や流行をまとめた記事、「平成」がどんな時代だったかについての世論調査記事、社会学者の談話記事などを読む。
⑤各自の新しい時代への願いをこめた新元号を創ってみる。
ただし、記事に書かれた平成改元の時の六つの条件を踏まえること、表記上の配慮として頭文字がＴ・Ｓ・Ｈ以外になるもの、辞書等を使って漢字の意味をよく調べることとした。
⑥各自の創った新元号をグループ内で発表し合って一つを選び、代表者がクラスで発表する。
⑦後日、全員のものをこめられた意味や願いも添えてプリントし配付した。
⑧「新しい時代への願い」を文章にまとめる。

生徒たちは、「改元」について、知ってはいてもそれまであまり関心を持っていなかったようだ。しかし、新聞記事をきっかけに平成を振り返り、新元号を創ってみるという活動を通して、科学技術の発達・ネット社会・自然災害・国同士の争い・少子高齢社会などさまざまな社会の問題に目を向け、考えた者が多かった。

新しい時代に願うだけでなく、「新しい時代をどう生きるべきかを考えなければいけない」「自分たち若い世代が争いを絶滅しなければならない」「すべての問題に対して一人一人が意識することが大切だ」など当事者意識を持った姿勢が見られたのがよかった。

〈２年国語表現〉

「まわし読み新聞」

各自が読んで考えを書くというところから一歩進めるために、よく行われているという「まわし読み新聞」を実施した。

①各自が新聞を読む。
②「おもしろい」「気になる」など興味を持った記事を切り抜く。
③４～５人のグループで、切り抜いた記事の内容や選んだ理由を一人ずつ紹介し合う。
④記事の重要度や配置を話し合って、模造紙に貼り付ける。記事には選んだ人の名前を書き入れる。
⑤編集後記として一人一言ずつ感想を書く。
⑥壁に貼り、他グループの新聞も読む。

各自が選んだ記事は、スポーツや実施時期のトップ記事が多く、多少偏っていたのは残念だったが、見逃してしまいそうな記事や考えさせられる記事を選ぶ者もいた。生徒が楽しんで取り組んだこと、他の人が選んだ自分の興味・関心以外の記事を読む機会が得られたこと、グループの中で発表したり、一つのものを作るために話し合ったりするコミュニケーションをとる機会となったことはよかった。

〈２年現代文Ｂ〉

新川和江の詩『ぶぅぶぅ紙を…』の授業では、生徒の戦争についての現実感の希薄さを補うものとして、少し古いものではあったが地元紙の新聞記事を利用した。

提示したのは、詩と同様に若くして戦死した叔父の残した日記や手紙が見つかった記事、戦時中に生徒と同世代の若者だった人が、自身も機銃掃射を受け同

級生を亡くした経験を語る記事の二つである。いずれも身近な地元や県南地域で起きたことであったため、戦争が遠い世界のものではなく、まさにこの地でもあったこと、生まれるのが少し早ければ自分の身にも起きたかもしれないこととして受け止め、詩の理解の助けとすることができた。

〈現代社会〉

「女子の制服ズボンもＯＫ」という、東京都内の中学校で広がっている、女子の制服にズボン着用を認める動きについての記事を読んだ。制服の原則の見直しを区長に直談判した女子児童や区長の考えを知り、多様な価値観や生き方、それが受け入れられる社会について考えた。

「フェイスブックの利用者情報の流出」の記事により、個人情報の管理に関わる問題について考えた。

〈２年生物基礎〉

「遺伝子情報とＤＮＡ　ゲノムと病気」の単元で、「新型出生前診断」の記事を活用した。出生前診断により生まれてくる子供がダウン症である可能性が高いとわかった場合、産まない選択をすることが多い現実がある一方、ダウン症の本人や家族が幸せに暮らしている例も多くあることを知った。さらに障がいについて調べた上で、自分であれば産むか産まないかについて、理由とともに発表し合った。正解のない難しい問題について、両方の立場を踏まえて自分の考えを深めるきっかけとなった。

〈２年家庭総合・３年保育〉

「子どもの権利と福祉」

この単元について学習していた時期に起こった幼児虐待の記事を活用した。読んで感想や思い浮かぶ言葉を発表し、このような虐待はなぜ起こったかなど、その背景について考え、自分たちが普段からできること、しなければいけないことについて意見を出し合い、共有した。

また、幼児虐待の記事に関わるコラムを読み、子供にとって保育者とはどのような存在であるべきか、子どもの発育・発達にとって重要なことは何かを考え、学んだ。

〈保健体育〉

「体育理論：スポーツと経済」

ビジネス五輪のモデルケースとなった1984年のロサンゼルスオリンピックに関する「もうかる五輪確立」という記事を利用した授業を実施した。オリンピックが単にスポーツの祭典ではなく、テレビ放映権やスポンサー導入など経済と切り離せないものになっていることを知り、来年の東京オリンピックの問題についても考えた。

保健分野では、感染症や食中毒の記事を活用した。

⑶３年進路学習

・４～７月の時期に新聞記事についての考えを書かせたが、各自の進路を意識させた上で自由に記事を選択させた。今年度の就職求人の予想記事を選ぶ者、希望する保育に関わる記事を選ぶ者など、記事の内容はそれぞれであったが、自分の進路に直結する知識や情報を得、意見をまとめることで考えを深めた。書いたものは担任がチェックし、独りよがりにならないよう指導した。

ここで読んだり書いたりしたことは、この後の志望理由書や履歴書の作成、小論文や面接といった本番の試験に向けたより具体的な準備に活かすことができ

た。

・毎朝のＳＨＲで、日直が新聞記事から今日のニュースを選んでその感想を発表した。情報を共有するとともに、考えをまとめて話すことで就職試験の面接対策にもなった。

３．成果と課題

１，２年生のうちの１００名に簡単なアンケートを採ったところ、家で新聞を取っているという者が６９名、取っていないという者が３１名であった。取っている６９名のうち、毎日読む者が３名、ときどき読む者が３０名、読まない者が３６名で、ふだん家で新聞を読むことのない者が７割近いことが分かった。

しかし、新聞について「字が小さく読むのが面倒」「漢字が多く難しい」「テレビやインターネットで十分」といった声もある一方、「社会で起こっていることを知れる」「好きなタイミングで落ちついて読める」「テレビより詳しく情報量が多い」「ネットより嘘の情報が少ない」という肯定的なコメントが多かった。家では読まない生徒たちにとって学校で新聞に触れる機会があることは、それだけでも意味がある。記事を最後まで読めない生徒、正しく読みとれない生徒がいるのも現実だが、継続することで少しずつでもできるようになるはずである。

新聞はあらゆるジャンルを網羅し、教材の宝庫と言える。世界や地域の情報を知り、様々な角度からの意見に触れられる。本校でも、新聞を授業や指導に利用することは日常のことになっている。しかし、今年度はただ資料として提示する形や読んで感想を書いて終わることが多く、十分に活かしたものとは言えなかった。他者の感想や意見を知り、互いにやりとりをしなければ、考えを深めるという段階に進むことは難しい。これまでやったことを継続するとともに、この点を進化させていくことが課題である。

ＮＩＥ盛岡大会に参加して

秋田県立大曲農業高等学校
教諭　佐　藤　　香

第２３回日本ＮＩＥ全国大会盛岡大会は、「新聞と歩む　復興　未来へ」のスローガンのもと行われた。大会を通して、東日本大震災のつらく悲しい体験、そしてその教訓を引き継ぎ、子供達が手を取り合って勇気と希望を持って進んでいく様子が感じられた。

例えば座談会では、岩手県で教師になることを目指している高橋莉子さんが登壇した。震災当時、大船渡市立第一中学校の１年生だった高橋さんは、生徒会有志で手作り新聞「希望」を作成し、学校、避難所、仮設住宅などに配布して交流が広かった体験や教師になってぜひ新聞を活用した授業を行いたいことを力強く話していた。

公開授業や実践発表からも、復興や地域の明日を主体的に考える子供達の姿が伝わってきた。生きる力を育む復興教育が行われていることに心を打たれるとともに、そのためにも新聞が大きな役割を果たしていることを改めて実感できた。

自然災害が各地で頻発する中で、生きる力を発信した示唆に富む大会であった。

ＮＩＥ盛岡大会にて

秋田県立大曲高等学校
国語科　小　川　　康

２０１８年7月２６、２７日にNIE盛岡大会に参加しました。２６日の開会式と明治大学教授の齋藤孝先生による記念講演は盛岡地域交流センター「マリオス」で、２７日の分科会はいわて県民情報交流センター「アイーナ」で行われました。被災地である大槌町にある大槌学園で行われた分科会に、日程の都合上参加できなかったことが悔やまれます。

２７日の分科会では、不来方高校普通科芸術学系の公開授業を中心に参観しました。国語科をメインにしながら教科を横断した取り組みとして、日本大震災の記事をもとに復興への思いを込めた彫刻、陶芸、絵、デザイン、音楽、自由の６分野が発表されました。当時小学生の彼らが経験した震災。報道を客観的に捉え、自らの体験と融合して作り上げた芸術は心を震わせました。

改めて新聞の力と様々な場面での活用方法があること、教科に関わらずNIEに取り組む環境を整える必要があるという課題を見つけることができ、勉強することができた２日間でした。

ＮＩＥ盛岡大会の感想「なぜ、新聞なのか」

秋田県立横手高等学校
教諭　松　江　正　彦

岩手県盛岡市で行われた第２３回ＮＩＥ全国大会盛岡大会は、東日本大震災が教育にどのような影響を与えたのかというということを改めて考えさせられる機会になった。

様々な取り組みや提案がある中、最も印象に残ったのは盛岡商業高校の「商業教育におけるＮＩＥ活用」であった。ビジネス系授業の実践に、地元企業の社長の講演や地元新聞の新聞記事、さらにはフィールドワークという方法を用いるアイデアは新鮮であった。何よりも、なぜ岩手でこの授業を行うのか。なぜ新聞が必要だったのか。そして、なぜこの記事を使ったのか。それらの問いに対して明確な答えがあり、意図があると感じた。

児童・生徒の変化が起きる場面には、多くのきっかけや働きかけが存在している。震災を一つのきっかけとして捉え直し、懸命に授業を作ろうとする姿勢には深い敬意を感じた。

私自身も確固たる意図と目的のある授業実践を今後も模索していきたいと改めて感じた。

「伝える力」ＮＩＥ盛岡大会に参加して

横手市立十文字中学校
学校司書　髙　田　幸　子

長いブランクのあと、私が再び学校司書の仕事に就いたのは東日本大震災の翌月のことでした。私の司書としての年月は震災の復興への道のりと同じ時間で進行しています。

あの出来事はどう伝えられたのか。

毎年３月の図書館展示には、後日出版された朝日新聞縮刷版の付録の「３月１１日の号外」を使用しています。混乱の中でも号外が発行されたこと。翌日の我が家にも新聞が届いたこと。避難所の手書きの壁新聞が人々にたくさんの情報をもたらしたことなど、人々の心に届いた新聞の「伝える力」の大きさを感じるとともに、実体験としての記憶が少なくなる年代の子どもたちにどう伝えていけばいいかが、毎年のテーマです。

そんな中でのＮＩＥ全国大会でした。宮沢賢治が大好きで、図書館の勉強をしたのも岩手でしたので、岩手には（勝手な）思い入れがありました。２０１５年の秋田大会は参加できず、残念な思いをしたこともあり、盛岡大会の通知があったときは嬉しくて真っ先に申し込みをしました。

座談会での若者たちの発表や大槌学園の子どもたちの発言を聞いて、自分たちの記憶を後輩たちや、その後に起きた地震や豪雨などの被災地の人々に伝えようとする姿に頼もしさを感じました。大会中に発行された高校生たち制作の「イーハトーヴＮＥＷＳ」には希望と未来を感じました。

横手市の小中学校では年８回の新聞の日があり、地方紙と全国紙１紙が子どもたちのために毎日届きます。恵まれた環境に感謝しながら、新聞の持つ力を信じ、子どもたちに未来を伝えていければと思います。

猛暑の２日間でしたが、爽やかな感覚で過ごしました。ありがとうございました

ＮＩＥ盛岡大会に参加して

鹿角市立八幡平小学校
教頭　近　藤　智　弥

①　仮設住宅、仮設店舗などがある。建物がまだまばら。

まだまだ復興の途中であることを実感した。

②　全町挙げて、将来を担う子どもたちを育てようという強い意志（熱意）を感じた。

岩手県の小中一貫校第１号である大槌学園は、その象徴のようだった。

③　・６年生の授業

大槌のために貢献している人たちの新聞記事に触れることで、自分自身を見詰め直し、大槌への想い（思い）をより強くしたのではないか。

・９年生の授業

西日本の豪雨災害の記事を、自分たちの体験を基にして、とても身近で現実的なこととして捉えていた。その上でどのような支援が必要かを具体的に考えていた。とても深いと感じた。自分たちの町がまだ復興途中であるにもかかわらず、現在被災している人たちを支援したい、恩返しをしたいと思っている生徒がたくさんいることに驚いた。

６、９年生の授業とも、子どもたち自身の生き方につながるとても意味のある内容であった。

ＮＩＥ盛岡大会参加の感想

能代市立淳城西小学校
教諭　大　髙　玲　子

ＮＩＥ全国大会への参加は、今回が初めてであった。まず何よりも驚いたのは、会場からあふれんばかりの参加者がいたことである。ＮＩＥへの関心の高さを知った。

１日目は、楽しみにしていた講演会。齋藤孝先生の痛快なトークの中には、新聞をより身近な教材として活用する具体的な方法がたくさん紹介されていた。担任している子どもたちの表情を思い浮かべながら聴くことができた。２学期からさっそく、「プレゼントレーニング」を開始したが回を重ねるごとに、記事に対する子どもたちの意識が変容していったことは、非常にうれしいことである。

２日目の公開授業は、社会と道徳を中心に参観した。

授業の中での新聞の活用の仕方が、参考になったことはもちろんであるが、感動したのは、授業に向かう子どもたちの姿である。どの子どもも、新聞記事の読み取りが早く、臆することなく自分の考えを発言し、共感的に受け止め、自然に語り合っていた。その姿に、これまでの実践の成果を感じることができた。生き生きとした子どもたちの表情を見て、私たちも、新聞から情報を得ることを楽しむべきだと実感した。

NIE 盛岡大会に参加して

横手市教育委員会
永　沢　敏　昭

NIE 全国大会盛岡大会は齋藤孝氏の「新聞力と復興」の記念講演から始まった。

まず、東日本大震災という甚大な災害を受けたにもかかわらず、その翌日から新聞を発行し、貴重な情報を提供し続けた大船渡市の一地方紙の記者魂に感服した。

２つめ、小学校から高等学校までどの校種でも新聞づくりに力を入れているように感じた。会場には子どもたちが作ったたくさんの新聞が展示され、大会当日は、高校の新聞部などの生徒たちが直に取材し、翌日には号外も発行していた。

三つめは、幼稚園や保育園でも NIE に取り組んでいたことだ。NIE に関わった OB や PTA 等が中心となって研究会を立ち上げ、新聞かるたを作ったり読み聞かせをしたりしながら就学時前から、新聞と仲良くなって欲しいと願って取り組んでいた。

岩手の素晴らしい実践とともに、アドバイザー会議では全国各地の有志と貴重な情報交換ができ、よりいっそうの情報共有と連携を進めていかねばと感じた全国大会だった。

これまでの秋田県のＮＩＥ実践校一覧

1995年度　秋田市立明徳小学校、秋田市立築山小学校、天王町立東湖小学校

1996年度　秋田市立明徳小学校、秋田市立築山小学校、若美町立払戸小学校

1997年度　若美町立払戸小学校、秋田市立中通小学校、能代市立崇徳小学校

1998年度　秋田市立中通小学校、能代市立崇徳小学校、雄和町立雄和中学校

1999年度　雄和町立雄和中学校、秋田市立大住小学校、峰浜村立峰浜中学校

2000年度　秋田市立大住小学校、峰浜村立峰浜中学校、秋田市立川尻小学校、横手市立横手南小学校、秋田市立桜中学校、秋田県立男鹿高校

2001年度　秋田市立川尻小学校、横手市立横手南小学校、秋田市立桜中学校、秋田県立男鹿高校、秋田大学教育文化学部附属中学校、大館市立城西小学校

2002年度　鷹巣町立鷹巣小学校、大館市立城西小学校、秋田大学教育文化学部附属中学校、二ツ井町立二ツ井中学校、横手市立金沢中学校、県立大館高校

2003年度　鷹巣町立鷹巣小学校、鳥海町立笹子小学校、二ツ井町立二ツ井中学校、秋田市立御野場中学校、横手市立金沢中学校、県立大館高校

2004年度　鳥海町立笹子小学校、鹿角市立尾去沢小学校、秋田市立御野場中学校、本荘市立本荘南中学校、横手清陵学院中学校・高校、秋田和洋女子高校、大館市立矢立中学校

2005年度　鹿角市立尾去沢小学校、能代市立朴瀬小学校、秋田市立金足東小学校、由利本荘市立本荘南中学校、大館市立矢立中学校、横手清陵学院中学校・高校、秋田和洋女子高校

〈県協議会指定〉
大館市立南小学校、大仙市立船岡小学校、北秋田市立阿仁中学校、大仙市立太田中学校

2006年度　能代市立朴瀬小学校、秋田市立金足東小学校、大館市立南小学校、大仙市立船岡小学校、北秋田市立阿仁中学校、大仙市立太田中学校、大館国際情報学院中学校

〈県協議会指定〉
男鹿市立鵜木小学校、にかほ市立小出小学校、横手市立横手西中学校、秋田県立雄勝高校

2007年度　大館市立南小学校、大仙市立船岡小学校、大仙市立太田中学校、大館国際情報学院中学校、秋田市立金足東小学校、男鹿市立鵜木小学校、にかほ市立小出小学校、横手市立横手西中学校、秋田県立雄勝高校

〈県協議会指定〉
八峰町立水沢小学校、秋田市立下北手小学校、由利本荘市立亀田小学校、大仙市立土川小学校、美郷町立千屋小学校、湯沢市立山田小学校、北秋田市立鷹巣中学校

2008年度　横手市立横手西中学校、八峰町立水沢小学校、秋田市立下北手小学校、由利本荘市立亀田小学校、美郷町立千屋小学校、湯沢市立山田小学校、北秋田市立鷹巣中学校、男鹿市立鵜木小学校、にかほ市立小出小学校

〈県協議会指定〉
大仙市立土川小学校、秋田市立旭北小学校、三種町立金岡小学校

2009年度　三種町立金岡小学校、北秋田市立鷹巣中学校、由利本荘市立亀田小学校、八峰町立水沢小学校、秋田市立下北手小学校、秋田市立旭北小学校、五城目町立五城目小学校、五城目町立大川小学校、にかほ市立象潟中学校

〈県協議会指定〉
鹿角市立平元小学校、横手市立朝倉小学校

2010年度　三種町立金岡小学校、秋田市立旭北小学校、にかほ市立象潟中学校、五城目町立大川小学校、五城目町立五城目小学校、横手市立朝倉小学校、鹿角市立平元小学校

〈県協議会指定〉
県立五城目高校、県立（定時制）本荘高校、能代市立能代第二中学校、大館市立南中学校、湯沢市立山田中学校、大潟村立大潟小学校、仙北市立神代小学校

2011年度　横手市立朝倉小学校、鹿角市立平元小学校、能代市立能代第二中学校、大館市立南中学校、湯沢市立山田中学校、大潟村立大潟小学校、仙北市立神代小学校

〈県協議会指定〉
県立五城目高校、県立（定時制）本荘高校、五城目町立大川小学校、五城目町立五城目小学校、男鹿市立五里合小学校、湯沢市立皆瀬小学校、北秋田市立綴子小学校、鹿角市立尾去沢中学校、由利本荘市立鳥海中学校、大仙市立太田中学校

2012年度　能代市立能代第二中学校、大館市立南中学校、湯沢市立山田中学校、大潟村立大潟小学校、仙北市立神代小学校、湯沢市立皆瀬小学校、由利本荘市立鳥海中学校

〈県協議会指定〉
県立五城目高校、県立本荘高校定時制、男鹿市立五里合小学校、北秋田市立綴子小学校、鹿角市立尾去沢中学校、大仙市立太田中学校、大館市立成章小学校、潟上市立出戸小学校、横手市立十文字第一小学校、県立秋田北鷹高校、県立横手高校定時制

2013年度　湯沢市立皆瀬小学校、大仙市立太田中学校、大館市立成章小学校、潟上市立出戸小学校、横手市立十文字第一小学校、県立秋田北鷹高校、県立横手高校定時制、能代市立能代第二中学校、能代市立浅内小学校、秋田市立東小学校、横手市立朝倉小学校、由利本荘市立由利中学校

〈県協議会指定〉
県立本荘高校定時制、男鹿市立五里合小学校、北秋田市立綴子小学校、鹿角市立尾去沢中学校、能代市立能代南中学校、羽後町立羽後中学校、県立秋田南高校、県立雄物川高校

2014年度　大館市立成章小学校、潟上市立出戸小学校、横手市立十文字第一小学校、県立秋田北鷹高校、県立横手高校定時制、能代市立能代南中学校、羽後町立羽後中学校、能代市立能代第二中学校、能代市立浅内小学校、秋田市立東小学校、横手市立朝倉小学校、由利本荘市立由利中学校

〈県協議会指定〉
県立秋田南高校、県立雄物川高校、秋田大学教育文化学部附属小学校、八郎潟町立八郎潟中学校

2015年度　大館市立成章小学校、能代市立浅内小学校、秋田市立東小学校、横手市立朝倉小学校、大仙市立豊川小学校、能代市立能代第二中学校、能代市立能代南中学校、由利本荘市立由利中学校、羽後町立羽後中学校、鹿角市立八幡平中学校、男鹿市立男鹿南中学校、大仙市立協和中学校

〈県協議会指定〉
秋田大学教育文化学部附属小学校、由利本荘市立上川大内小学校、八郎潟町立八郎潟中学校、県立秋田南高校、県立雄物川高校、県立横手高校定時制課程

2016年度　大館市立成章小学校、大仙市立豊川小学校、由利本荘市立大内小学校、大仙市立協和中学校、鹿角市立八幡平中学校、男鹿市立男鹿南中学校、六郷高校、秋田大学教育文化学部附属小学校、八郎潟町立八郎潟中学校、由利本荘市立由利中学校、雄物川高校、横手市立朝倉小学校

〈県協議会指定〉
鹿角市立八幡平小学校、潟上市立飯田川小学校、横手市立山内小学校、横手市立山内中学校

2017年度　八郎潟町立八郎潟中学校、由利本荘市立大内小学校、秋田県立六郷高等学校、鹿角市立八幡平小学校、潟上市立飯田川小学校、横手市立浅舞小学校、横手市立平鹿中学校

〈県協議会指定〉
大館市立成章小学校、由利本荘市立由利中学校、鹿角市立八幡平中学校、男鹿市立男鹿南中学校、大仙市立協和中学校、大仙市立豊川小学校、美郷町立美郷中学校

2018年度　鹿角市立八幡平小学校、能代市立渟城西小学校、潟上市立飯田川小学校、由利本荘市立由利中学校、横手市立浅舞小学校、横手市立平鹿中学校、美郷町立美郷中学校

〈県協議会指定〉
能代市立能代第一中学校、秋田市立金足西小学校、大仙市立豊川小学校、秋田県立六郷高等学校

2018年度　秋田県NIE推進協議会役職員（2018年７月１日現在）

顧　問	米田　　進	秋田県教育委員会教育長
〃	佐藤　孝哉	秋田市教育委員会教育長
会　長	阿部　　昇	秋田大学大学院教育学研究科教授
副会長	眞壁　聡子	秋田県教育庁教育次長
	嶋崎　公人	秋田市教育委員会教育次長
	櫻田　博憲	秋田県立新屋高等学校長（秋田県高校文化連盟新聞部会長）
	木村　哲弥	横手市立平鹿中学校長（NIE 実践校代表）
	福司　秀俊	秋田市立太平中学校長（秋田県中学校長会）
	根　　義鎮	秋田県立六郷高等学校長（NIE 実践校代表）
幹　事	佐藤　孝男	秋田魁新報社執行役員読者局長
	林　　敦彦	朝日新聞社秋田総局長
	大槻　英二	毎日新聞社秋田支局長
監　事	松田　博英	河北新報社秋田総局長
	藤澤志穂子	産経新聞社秋田支局長
	竹之内知宣	読売新聞秋田支局長
会　員	早川　　淳	日本経済新聞社秋田支局長
	伊藤　　仁	北羽新報社編集局長
	戸部　　大	共同通信社秋田支局長
	張替　昭彦	時事通信社秋田支局長
	外池　　智	秋田大学教育文化学部教授
	神居　　隆	秋田大学付属教育実践研究支援センター客員教授
事務局長	齊藤　　敦	秋田魁新報社読者局総務ＮＩＥ・読者交流担当

秋田県ＮＩＥ推進協議会

事務局　秋田魁新報社内
（読者局ＮＩＥ推進部）
nie@sakigake.jp

〒010－8601　秋田市山王臨海町1－1
☎ ０１８－８８８－１８２２
Fax ０１８－８２３－２０９６

Newspaper in Education

「新聞の力」、報道のプロが伝えます!!

秋田県 NIE 推進協議会を構成する報道機関各社は学校への記者派遣、先生方との教材開発･授業開発などさまざまな NIE 事業を展開しています。先生方･学校から各社に直接、お問い合わせください。

社　名	連絡先（メール）	連絡先（電話）	住　所
秋田魁新報社読者局NIE担当	nie@sakigake.jp	018-888-1822	〒010-8601 秋田市山王臨海町1-1
朝日新聞社秋田総局	akita@asahi.com	018-823-5121	〒010-0951 秋田市山王2-1-46
河北新報社秋田総局	akita@po.kahoku.co.jp	018-833-4477	〒010-0001 秋田市中通3-2-44
共同通信社秋田支局	—	018-862-4813	〒010-0956 秋田市山王臨海町1-1
産経新聞社秋田支局	akita@sankei.co.jp	018-823-5454	〒010-0917 秋田市泉中央2-3-18-505
時事通信社秋田支局	—	018-823-6591	〒010-0951 秋田市山王6-10-9
日本経済新聞社秋田支局	nikkei-akita@nex.nikkei.co.jp	018-823-5233	〒010-0951 秋田市山王1-7-2
北羽新報社報道部	hokuupost@hokuu.jp	0185-54-3150	〒016-0891 能代市西通町3-2
毎日新聞社秋田支局	akita@mainichi.co.jp	018-823-2181	〒010-0951 秋田市山王2-1-53
読売新聞社秋田支局	akita@yomiuri.com	018-824-2211	〒010-0951 秋田市山王6-2-1